
食われた俺のゼロ魔戦記

ろんろま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食われた俺のゼロ魔戦記

【Zコード】

N4663Y

【作者名】

ろんりま

【あらすじ】

聖剣世界に転生して、地道に生活していた俺はある日竜帝に（食事的意味で）食べられた。その竜帝も倒され、ああこれから滅ぶんだなと思っていたら目の前に光の帯が…これはいくつきやないだろう！

これは竜帝に食われた主人公が、竜帝を相棒として異世界でいろいろやっていくお話です。捏造、原作ブレイク、最強上等！（竜帝が）。主人公は中ボスぐらいい。

プロローグ（前書き）

気づいたらやっていた。ドラまたのネタが思いつくまで気分的に更新予定。

これはアナログプロットがあるので更新早いかも。
ドラまたH…。

プロローグ

…ああ、終わってしまったのか。

デュランの奴が竜帝の喉を貫いたとき『中』でそう思った。

この聖剣世界にハーフエルフとして転生して早三十年。
一年前にこの竜帝に食べられて、ずっと止まっていた時がようやく
流れるみたいだ。

転生した最初は呆然としたなあ。なんせトラックに弾かれて気づいたらミラージュパレス。

普通こういうのって転生特典とかあるだろ? 何もないし、強いて言えばハーフエルフだけだった。

まあ、折角なので原作ブレイクしてみたいじゃん?

つて感じで主教様に魔法を教えてもらったり、ロジゴたちと平和に過ごしてたけど、何も出来なくてさ。

悔しかつたな。

でも所詮現実なんてそんなもんだ。

原作通り世界大戦が起きて、壊れしていく主教達を年齢よりもずっと幼い体で悲しく見てた。

やがて反乱軍となつたロジHたちと合流したけど、テケリよりもちつこい俺は何も出来ず、カオスオーシャンに消えていく家族を見ていた。

：最後にちやんとお別れできたのが救いだった。

その後、俺はベルガーさんに引き取られ、神官修行に明け暮れた。あ、ヒースとも仲良くなつたよ？

優しい聖都生活の中、すさんだ心は少しずつ癒された。

：リロイを救うことは出来なかつたがな。でも、数年寿命を延ばすことには出来た。

あの時は久々に泣いた。中身はとっくに成人してゐるのに子供みたいにな。

それから色々あつて、修行を続けた俺は竜帝退治の回復役として無理矢理くつついていつた。

丁度この時期ロキさんが死んでしまつたのを思い出したからだ。

ベルガーさんはこの時不治の病にかかっていた少女を看ていたから、そのかわりにな。

結果的にロキさんは救えた。ただ、フェアリーは竜帝の隙を作るために…。

攻撃魔法をそんなに使えなかつた俺はこの田を機に攻撃魔法も学んだよ。

聖都に戻ると、ベルガーさんが泣いていた。

禁呪を使ってでも少女を助けようとしてしたけど、他でもない少女に断られたらしい。

彼女は人間のまま死ぬことを選び、一月後亡くなつた。

…後で思い出したんだがこれでベルガーさんの反乱フラグが消えたんだ。

俺は少女に出来る限りの感謝をしたよ。

養父の凶行を止めてくれてありがとうございました。

彼女は笑いながら逝つた。

当然、手厚く葬つたさ。

俺達は彼女の分まで人を救おうと決意新たにし、そこから11年経つた。

たまたまアルテナにきていた俺は、魔法練習している男女に出会つたんだ。

あまりにも必死な姿に、ついつい声をかけてそれがアンジェラ王女と後の紅蓮の魔導師だと知つた。

まあその時はそこまで思い出してなかつたが。

何とか魔法を使わせてあげたいな、と思つた俺は一人を連れてウンディーネを訪ねてみた。

俺のお願いにウンディーネは快く頷いてくれて、一人は何とか水を

出すことに成功。

紅蓮さんは魔力が少なかつたからちよびっとしかでなかつたが、アンジエラ王女は滝のように出た。

…死ぬかと思つたぜ。

まあ魔法使えるようになつてよかつたな、と祝つて俺はアルテナを出る…筈だった。

紅蓮さんがクオン大陸へ行つてしまつたのだ。

あそこは倒したとはいえ竜帝の眠る場所。

アンジエラ王女に頼まれた俺はすぐさま連れ戻しにいき…既に復活していた竜帝に喰われた。

そこからの記憶は非常に曖昧だ。

なんとなーくナバールとローラントへ行つた覚えはあるんだが…何をしたかなんて覚えてない。

でも良いことをした気がするのは何でだ?

はつきり覚えてるのは仮面かぶつて各地のマナストーン解放してたぐらいかな。

多分ビコウか絶対洗脳されてたんだな、俺。

自我取り戻したのはどっからだけ…。

敵対組織をぶつ潰し、ドラゴンズホールで勇者たちと対面したとき

かな？

流石にかわいい妹シャルロットを見ればイヤでも起きる。
…システム言うな自覚してりあ。

その時の俺の台詞、こうだもん。

「来たな。マナの剣を寄越…シャルウ！？」

「…？」

いやー、あれは面白かった。

敵味方関係なく驚いて俺見たからね。

まあそんな感じで洗脳解けた俺ですが、あつさり竜帝に連れ戻され
ちまつて。

役に立たん！と罵倒されて再び洗脳…それかけたけどじつくりお話
して、きちんと手を抜かず戦うと確約した。

それまで自由にしてると言われたのでウェンデルへ戻り、ベルガー
さんとヒースにお別れを言いに行つた。

勝手に死んでごめん、さよならつて。

…今思つと竜帝の一欠片の情けだつたかもしれん。ちょこつとだけ
感謝してやる。

で、ドラゴンズホールに戻った俺は約束通り本気で勇者たちと殺し合つて…負けた。

いやー、あいつらもつ相当の化け物だぜ。

だが、シャルロットには悪いことした。

俺はもうアンデッドだから、もつ聖都には帰れないって。

…大泣きされて打たれるわ蹴られるわ、ま、俺が悪いんだけどな?

男一人も辛そうだった。

おこにいら、野郎がそんな情けない顔するんじやない。

そう呟つて、シャルの頭をなでて俺は滅んだ。

そして今、俺は竜帝の中にいる。

真っ黒な空間で、竜帝が恨めしそうに俺を見ていた。

『貴様が奴らを殺していれば、こんなことは

いやいや無理だつて。

見ただる、あいつらのチカラ。

今おまえが滅んでいるのが何よりの証拠だ。

『…くつ、いつの時代も邪龍は滅ぼされるのみか』

まあ、そういうことなんだろうつ。

でもお前はよくやつた方じゃないか? そりゃあ神様殺すなんて許せないが、出来ることでもない。

『貴様に言われても空しいだけだ……』

はいはい。

ほら、ひとつと滅ぶぞ。そんで次行くんだ次。

『次だと?』

転生って知ってるか?

実際に体験した俺が言つんだから、次に転生して一緒にバカやろうぜ。

『貴様、どこまでアホなのだ…我らはこのまま滅ぶ運命、女神にも覆せぬ』

まあ普通はそうだろうな。

でも、何となくそうならない気がする。

『これは!?』

光の帯が俺たちの目の前を横切った。

とてもないエネルギーだ。ひょっとしたら滅びかけた俺達を呼び込めるかもしねいぐらいに。

「行こうぜ竜帝! あつちで新たに人生始めよ!」

『…いいだろ? ここまでくれば未練もない。貴様につきあつてやる、ハーフエルフ!』

そこには名前で呼ぶところだらう! 一

何、忘れた？

しょ「うがない」。

「俺の名前はイオ！ ハーフエルフのイオだ！ しつかり覚えるよ
相棒！」

『誰が相棒だ！ 元配下の分際で！』

そう言って、俺達は光の帯の中に飛び込んだ。
だが、その後を追うかのようにハつの光が飛び込むには、気づけ
なかつた。

「んじゃ異世界

光の帯を抜けた先に、女の子がいました。
俺達の目的である肉体再生がつましくったと思つたら、これどいつ
う状況？

落ち着け、俺達の状況を確認しよう。

肉体の再生は出来てる、理屈は知らん。
俺は竜帝に食われた時の服装のままで、ゆつたりとした雪国の服だ。

対して竜帝。「こりは打つて変わって王様が着るよつた豪奢な服だ。
…つーか何故人間の姿になつてる？

まあ本来の姿はでかすぎるにも程があるから良いんだけど。

それにもつ一つ。

何か俺異常に怯えられてませんか？

「ゼロのルイズがエルフを召喚した…」

「エルフだけじゃないぞ、ビージャの貴族と平民まで…」

ん？ 平民？

きょりつと辺りを見回して見ると、ぽかんとしている黒髪の少年が
いた。

どいつも状況か判つてないなこりや。そこは俺達も同じだが。

「コルベール先生！ 納得がいきません、儀式のやり直しを…」

俺たちを呼び出したっぽいピンク髪の美少女がちよつと禿気味の男性に言ひづ。

ふむ、儀式と言つていたし結構大事な事なのかね？

「すみません、状況の説明を求めます」

「そもそも貴様等塵も残さず消すぞ」

おこじらー

何物騒なこと言つてるんだよー！

「は、何を言ひ。我是竜帝ぞ、何故下等な者共を氣遣わねばならん

…そりいえばおまえはそういう奴だつたな。

まあいざとなつたら俺が抑えればいいし。抑えられるかなんて聞くなよ！」

男性は少々冷や汗をかきながら、しかし油断なく言つた。

「判りました、説明しましょう」

曰く、これは使い魔召喚の儀式だそうで、ここにいる彼女の進級がかかっているらしい。

ここ学校だったんだな。聖都にも似たようなのがあった、ここまで豪奢じやないけど。

話は戻すが、同時に複数の使い魔が召喚されたことなど未だかつてない上、俺がエルフというのが問題らしい。

契約してくれるのが否か。

契約の方法はキスらしい。

「俺は良いよ～。そもそもお嬢さんに呼ばれなきゃ死んでた身だし」

「… 我も特別に許可してやね!。そこな小僧はどうする?..」

「お、俺? … ハーん、その子が困つてゐなら別に良じけど」

少年、キスする」と前提に考えてるか?

… 多分考へてないだらうなー、何といつか能天氣っぽい。

しかし竜帝が許可を出したのは意外だ。使い魔なんて絶対にやらな
れやつ

「……(じゅるつ)」

食つ氣だ。あの目は捕食者の目だ。

これはいかん、竜帝から絶対に目が離せなくなつた。

そんな俺の心配を知つてか知らずか、美少女はふるふると震えながら俺たちを見た。

「… か、感謝なんかしてないんだからね! へへへ、平民が貴族と
こんなことできるのに寧ろ感謝しなさいよ!」

やつぱり、美少女は呪文を唱えつつ俺たちとキスする。
… えーと、何かごめん? でもちょっとびつどやさしいわ。ビーセフ
アーストキスだよ!

ズキッ！

「あいたつ！」

右手が焼けるように熱い！

…だが、まあそれだけだ。実際に致命傷負つて死んだ身としては我慢できなくもない。

「ふむう…珍しいルーンですね。少しスケッチさせて下さい」

ああ、どうぞどうぞ。

あんまり興味ないんで。

少年は左手、竜帝は俺と同じく右手に刻まれたみたいだ。

…俺たちの言葉と少し似ているな。少年のはガンダーヴル？

俺たちは…しん、く、ろ。シンクロ？
まあ読み方があつてる保証なんてないが。

「ではこれで春の召喚の儀を終わります。ミス・ヴァリエールは彼らとじつくり話し合つて下さい」

「え！　コルベール先生！？」

「大丈夫、契約は済んだのだから。それに、エルフと言つても彼は無害だと思えます」

…」の世界のエルフは鬼か悪魔か？

「まあ、改めてよろしくお嬢さん、少年。俺はハーフエルフのイオ」

流石に俺は自分より弱いもんをいたずらの趣味はない。

「我が名は竜帝。他を知りたければ対価を寄越せよ?」

「えつと、俺は平賀才人。あのさ、これ何のドッキリ? 早く家に
帰りたいんだけど…」

ん?

サイトよ、召喚の意味分かつてない?

「うーつのつて呼び出されるかは本人の意思で、しかも一方通行だ
から…」

「ええっやうなのか!?

「呆れた…あんたちゃんとゲートを見て私の呼びかけに応えたの?」

「いやだつてさ、あんな面白うなの見たら…入りたくなると言つ
か」「

まあ同意はするわ。

似たような理由でやつてきたからな俺達。

しかしそうなると、サイトを元の世界へ戻してやる術が必要になる
な。

服装からして、この世界の人間じゃないし。

ファ・ディールでもあんな服ないぞ。

「サイトのことは追々考えるとして…ルイズ嬢、ここではエルフは恐怖の対象なのか?」

「何言つてゐるよ! 私たち人間から聖地を奪つたエルフは敵よ敵! あんたもエルフなら……そういうばあんたハーフなの! ?」

そんな驚いた目で見んでも。

何々、詰まるところ俺はルイズ嬢たちの宗教じや異端なんですか。ほお…。

「一度、その宗教の開祖にお話してやりたい気分だ…」

「ふん、女神の教えは全ての愛を平等にだつたか? まあ元神官な貴様には許せん内容かもな」

そーだよ俺は元々クレリック!

詰まるところは聖職者。まあ他教にうだうだ言つつもりはないが、人間以外全て敵つてどんなんだよ。

人も亜人も仲良くなれるつつの一!

これで聖職者にマトモなのがいなきゃ弾圧しにいくかもしねー。
まともな奴いますように! -

「元神官…もしかしてイオつてす」いのか?」

「ん? 回復魔法なら得意分野だよ。たとえ瀕死の重傷になつた
も一瞬で回復してやるぜ?」

「ぐり、と一人が息を飲むのが判つた。

この世界の魔法じゃ無理なのかね？」

「回復に関しては貴様とその妹が規格外すぎるだけだ」

なんだあの超回復、どれだけ魔法撃とうと死なないなんてどんなホ
ラーだ、と竜帝はつぶやいた。

「…気持ちは分かる、次でトドメと思つたら傷一つなかつたなんてザ
ラだからな。」

しかしシャルロットが竜帝のトラウマになつてゐるとは思わんかった。

「あ、そうだ。

一応使い魔の仕事言つとくわよ？

ひとつは感覚の共有。でもこれ何も起きてないわね？」

感覚とこうと視覚や聴覚とか？　ぜんぜん共有されてないな。

「一ひとつは宝石や薬草の収集。でもこれもあんまり期待してないわ。
二つ目、主人を護ること。あんたたちつて戦えるの？」

「我をなんだと思っている、竜を統べる帝だ。世界を滅ぼせる程度
の力は持つている」

俺除く全員が盛大に吹き出した。
比喩なくそれだから困る。

「えっと俺は…喧嘩ぐらにならひけると思つ」

「ラスボス以外なら大体イケる

特に広範囲殲滅戦が得意だよ！とは口に出さない。まあその気になればこの学校壊すぐらいのチカラあるし…。

あ、ルイズ嬢呆れてる。

「はいはい、あんまり期待しないわよ。

あ、そうだ。流石に人間が、それも三人も召喚されると思わなかつたから、寝床の準備がなくて。

その、外で寝てもらえないかしら？」

ん、野宿か。うん、俺はかまわんよ。

…何さ竜帝。その不満そうな顔。

「いやにあっさり頷いたわね

「でもせ、テントとかはどうするんだ？」

良い質問だサイト。

だが問題はない！ 僕には倉庫があるからなー！

ファ・ディールいちの便利魔法『倉庫』から、テント用具を引っ張り出す。

中身が無事で何よりである。

ルイズ嬢があり得ないものでも見ている目を向けてきた。
いつとくが旅人なら使って当然なんだからなー！？

こうして、俺と竜帝の異世界一日目は終わった。

…ただ、流石にテントに男三人は失敗だったと記しておぐ。おえ。

「なんむすびで異世界（後書き）」

第一話。

規格外なのは当然です、一応は黒曜の騎士の代わりなので。
近接戦闘も割といけます。

墮ちた聖者の戦い方に近いかも。召喚は出来ませんがね。代わりに
狂ったようにエインシャントを使うのがイオです。
使用魔法は割と手広いんですが出番あるのかなー。
しかしこの小説、空気が多くそうである。

異世界へ日田（前書き）

予定では決闘編まで行くつもりだったのに…あれ?

「うわあ…ひどい目にあつた」

テントの外にでると、まだ夜が明けた頃じゃないか。
神官の時の癖でそんな時間に起きてしまつた。

サイトと竜帝はまだ寝てる。

しつかし…夢じゃなかつたんだなあ。

そうだ、軽くお祈りして散策しよう。

学校内はともかく、近くの森ぐらいならいいだらう。
では女神様、今日も一日が良い日でありますよ!ついに…
この世界には女神様いないだらうけどね。

散策終了!と!

ん? 森の生態系とか植物とか調べてただけだぞ。
似てるようで似てないのが多かつた。: 魔法の植木鉢作つて育成で
もするか?

種も倉庫に放り込んだいたし。

そんなことを悩んでたらいつの間にか陽が高いな。
さすがに起こそう。

「おーい、朝だぞ~」

「あと五分……」

「……」

……お前ら起きる気ないだろ。竜帝なんか防音結界張つてゐるし。
ちなみに竜帝は浮いて寝てる。雑魚寝が嫌だつたらしい。
相当シユールだ……テントがそれなりの大きさじやなけりや どうする
氣だつたんだ?

まあ起こすけど。

「アンティマジック」

べちつ！ 魔法効果が解けて竜帝が落ちた。
頭から落ちた氣がするが大丈夫だろ。

「サイト」

「…ふひひ」

うわあ、こらつとく。

優しく起こそうと思つたけどやめた。

「必殺！ はりせんちよおつぶー！」

「ぶふおーー？」

ズパーーン！と良い音が鳴つた。

うん、あの時シャルにやられたんだがよく効くな！

「貴様…元配下の分際で…」

あ。

*

楽しいお勉強の時間だー。

え、やけに棒読み？　あの後どうしたって？　聞かないで下さい。

強いて言つなら朝ご飯食い損ねたな。

で、現在ルイズ嬢の授業に同席中。全員そろつてな。

「おや、ずいぶん珍しい召喚をしましたね、ミス・ヴァリエール」

俺達割り込みましたから。

するとふとっちょの少年が立ち上がった。

「どうせその辺の平民を連れてきたんだらー、ここ一寧に飾り耳までつけてー！」

「何ですってー？」

飾り耳じゃねえぞーと、言いたいところだが黙つといった方が良いな。
ふとっちょよ、是非とも広めてくれ！

「大体サモン・サーヴァントで二人も呼び出すのが可笑しいんだよ、
ゼロのルイズ！」

「ミス・シュウルーズ！ 毎晩されましたわ、風邪つぴきのマリコルヌだ！」

「か、風邪つぴき…僕は風上のマリコルヌだ…」
「これは…一つ名かなんか？
しかし風上と言つことは風の魔法が得意なのか。でもルイズのゼロ
ってなんだ？」

あ、先生が粘土を飛ばして黙らせた。

うん、先生は怒らせちゃいかんよな。
昔、魔法の師匠だったベルガーさんを怒らせたときなんか…やめよう。ダークリツチの幻影が見える。

つと、ちょっと意識飛んでたな。
危うく魔法講義を聞き逃すところだった。ランク分け理解！

しかし面倒な魔法だ。杖がなきゃ使えないなんてな。

「なあなあ、ルイズの系統つて何なんだ？」

「わ、私は…その…何でも良いじゃない！」

おーい、五月蠅いと先生に叱られるぞつて遅かった。
眼鏡が光ってる…。

「ではミス・ヴァリエールに鍊金を実践してもいいましょう！」

ビクツとクラスが凍りついた。

「何だ？ 怪えてるぞ。

青い顔をした赤毛の美女が立ち上がった。

「先生、やめてください！ ルイズは！」

「何です、ミス・ツェルブストー。よもや貴女まで彼女を侮辱するわけではありませんね？」

「違います！ ルイズの魔法は危険なんですよ！」

「？」

妙だな。クラスの様子からしてもただ事じゃない。だが、観察しているうちにルイズ嬢は行ってしまった。

「竜帝」

「面倒だが……心得た」

生徒はみんな机に隠れてしまったので、俺達だけ防御魔法を展開する。

ちゅぼおん！

「げつ！」

思わず声にててしまった！

ルイズの魔法はとんでもないな！ 竜帝の防壁を搖るがすとさ。

「ちゅうと、失敗してしまったみたいね」

無事なよう何よりだけど、煤けてるよ。

結果、ルイズ嬢はぼろぼろになってしまった教室のドアを詰めこみ、じられた。

俺達も手伝いを申し出たが……氣まずい。

ルイズ嬢は泣いていた。

「……魔法成功率0。だからゼロのルイズ……笑っちゃうでしょ。
学院では、いいえメイジなら使って当然のモンスターを失敗しちゃうんだもの、お似合いよね」

そう言つて、自嘲したように笑う。

既視感におそれる。俺はかつて、似たような人に出会つた。

『魔法を使えるようになつて、みんなに認めてもういたいの一』

「アンジョラ王女……」

咳きが風に消えた。

目の前の少女は、同じ苦しみを背負つてゐる。

サイトが言つた。

「似合つてねえよ。そんなの、全然似合わない！」

「サイト？」

「爆発するからなんだよ、それだつて立派な魔法だろ！
他の誰にもできない、ルイズだけの魔法だ！」

「そう、その通りだ。…ルイズ嬢、聞いてくれる？..」

「…何？」

「魔法が使えなかつたお姫様のお話」

ルイズ嬢が目を見開いた。

それを肯定と受け取つて昔話のよつに話し始める。

「とある魔法王国に、一人のお姫様がいました。
お姫様のお母様は、魔法王国最高の魔法使いでしたが、お姫様は
魔法を使えませんでした」

すつと竜帝が目を向けてくる。かまわず続けた。

「お姫様は魔法王国の姫、魔法が使えないことはなりませんでした。
ですがどんなに頑張つても魔法が使えることはありませんでした」

「そのお姫様は、どうなつたの？」

震える声でルイズ嬢は言った。

「見かねた神官が、精靈を頼りチカラの振り方を教えてくれました。

その結果、お姫様は魔法が使えるようになったのです

「精霊…？ そのお姫様が使ったのは系統魔法じゃないの？」

いやこれ違う世界の話だしね、とは言わない。

「彼女は、生まれ持つ魔力が大きすぎたんだ。人の身では扱えないほど！」

だから神官は強い力を持つ精霊に頼んで、チカラの振り方を教えてあげたんだ」

ルイズ嬢も同じじゃないかな、と竜帝に目を向ける。

「そうだな。小娘は我が見ても目を見張る魔力、…こちらでは精神力だつたか、を持っている。
思わず食らいたいぐらいのな」

一瞬、朧気なドラゴンの姿が見えた気がした。

何度か見た、竜帝の本性。

「…嘘、私がそんなチカラ、持ってるわけ」

「疑うなら疑え。安心しろ、貴様は魔法が使える。チカラの振り方さえ覚えれば、特別飛び切りのな」

特別飛び切り？
ん？

「最後まで教える義理はない、後は自分で考えろ。それより腹が空いた」

「… そうだな、早く戻ってきて飯行こうぜルイズ！」

「… もう少々気安く名前で呼ばないでよー 使い魔のくせに…」

「… いやら調子を取り戻せたみたいだ。よかつたよかつた。
ついで竜帝、さつきの言葉つて… もしかして…？」

「何も言つな

「… ん、そうだな

まだ誰も気づいてないだろう。
ならばその方が良い。

「… ちやつちやと戻ってきて、飯に行きますか！ 竜帝も手伝えよ
な！」

異世界2日目（後書き）

魔法紹介！

アンティマジック：

敵一体の全魔法効果解除、初期化。

ここでは解呪の基本魔法として扱う予定。割とよくでる？

はりせんちょっぷ：

聖剣伝説3主人公の一人シャルロットのクラス3プリーストの必殺技。

例の戦いでやられる以前から持っていたハリセンを使用。何故持つてたかは謎。

別れの戦いの時には容赦なくシャルロットに使われた。

余談だがそのカウンターでエインシャント浴びせたが倍返しが来た模様。要するに袋叩きである。

一応ただのハリセン。

決闘?いやござれだらうれ（前書き）

決闘編。

正直にはあまり覚えてなかつたり…。

タイトルは、お察し下さい。

決闘？いやこじめだひれ

決闘だ！

金髪の少年が高らかに声を上げた。ただしそれはサイトの方。

俺はとこうと、同じく金髪なんだナゾビシカ陰険そな少年に睨みつけられていた。

身に覚えが無さあれるんですけど！

少年が言った。

「ここは、貴族専用の食堂だ。そしてそこは僕の席でもある……意味分かるな、平民？」

俺が座つているここは竜帝が座つている席の隣である。
厨房行くぞつて言つても聞かなかつたんだよ…。

面倒事の予感。

「その付け耳といへ、そつちの偉そな態度といへ、躰がなつてないようだな。

たすがあのゼロの使い魔だ、品がない！」

「…食事中に騒ぐことの方がマナー違反、品がないと思つんだが

それにルイズ嬢は関係ないだろ！」
あ、本音がぽろつと。

「貴様、貴族を侮辱するか！」

「侮辱も何も貴様の方が品がないだらう」

そつ言つて優雅に食事を続ける竜帝。
おい、火に油注ぐな。

あーあ、陰険少年の顔が真っ赤だ。

「決闘だ！ 平民は平民らしくすることを教えてやるー。」

「だが断る。食事の邪魔だ、失せろ」

同感だがもうちょいオブラーート【包みよ】竜帝。

すると、陰険少年は悪戯を思ついたかのように一ヤシと口角を上げた。

「そつか、怖いんだな？ そんな風に貴族の真似事をしようとも所詮は平民。

僕達貴族に比べれば下等な存在だ」

ピクリと竜帝の指がふるえた。

やばい、本気で怒つてるかもしね。そうなつたら世界終わるぞ。

…はあ。

「陰険少年。相棒の悪口はそこまでこじれてもいいわ！」

「陰険少年……だと？」

「性根の腐つてゐる悪ガキには陰険少年でも上等な呼び名だ、有り難く思おうか。

それにルイズ嬢も馬鹿にされたのじゃ黙つてられなくてね、決闘は俺が受ける」

思い切り貶すようだが少年のためだ！

さすがに聖職者としては自殺志願者を見捨てるわけには行かないし。

少年は乗るかな？

「いいだろ？、その付け耳切り落としてやるー。」

「うむ、物騒な。

つて竜帝笑つてやがる…ハメられた！

そんな訳で何とかの広場。

どつせなう対2でとこいつになつたんだけビ…「うーん。

「サイトかばつのせ面倒くさいから…『仮障男くん丸投げして良い』？」

「ちよー。」

だつてサイトの売つた喧嘩だろ？

俺、基本は護身術しか使えないんだよ。

フレイルあればまとめて相手できるけど、使うのハリセンだし。

「」の方が屈辱的だからな！」

「そんな紙切れで僕たちを相手するのか？」

呆れた顔を向けてくる陰険少年もとい、ヴィリエ。

いやいやこれで十分すぎるぐらいだし。

「サイト、イオ、やめなさい！ 今なら一人とも許してくれるわー！」

「」めん、ルイズ。でも下げたくない頭は下げたくないんだー！」

「似たような感じ。大丈夫、負けないよ」

「 つ！ 怪我するんじゃないわよー！」

それだとサイト無理じゃね？

氣障男くん ギーシュが杖を掲げる。

「では、始めよー！ 僕は青銅のギーシュ、土のダッシュメイジだー！」

「風の名家ド・ロレーヌのラインメイジ、ヴィリエだー！」

「俺は平賀才人！ おまえらのいう平民だー！」

「名乗るのかこれ？ ただのイオだ」

「行くぞー！」

ギーシュの一聲で戦いが始まった。

ギーシュは人形を生み出し、ヴィリエは風を放つ。

順番バラバラか。おい、連携プレーしろよ。

放された風を軽くかわすと、周囲が息を飲んだのが判った。

「それが本気か？」

「つ、なめるな！」

杖に収束する風が増えたが…まだまだそよ風だな。軽くかわせる。それよりサイトの方は、早くもやばいか？ 人形に翻弄されている。怪我するなって言われてるし、さっさと終わらせますか。

「！」の、なんで当たらないんだ！

「答えは単純、陰険少年のレベルが足りないだけだ！」

ズパパン！

手に持つハリセンが、ヴィリエの頭と手をとらえた！

単純なダメージよりも、耳元で鳴った強烈な音に、ヴィリエは杖を落とした。

ヴィリエの杖を拾つてにっこり笑う。

「お前の負けだ」

「…！ 嘘だ、この僕が平民なんかに！」

ヴィリエが吠えているが無視。

「サイト、手云うだ

「手を出さないでくれ！」

はい？

いやいや、そんなぼうぼうな体で何言つてゐのを、やられるが？

「判つてゐ……でも、これは俺の喧嘩なんだ。俺がけりを付けなきゃ意味がないんだ！」

それに、俺はこいつにルイズをバカにされたのが何より許せねえ

！

「……」

……はあ。

「ここまで言われちゃ手を出す気も起きんよ。

「判つたよ、手当はしてやるから碎けていい

そう言つと、サイトはこいつを笑つて再び人形に突っ込んだ。

そして数分後、見事にボコボコにされたサイトが出来上がった。

……流石にもつ限界だな。

「サイト、もういいでしょ！ ギーシュ、やめてちょうだい！」

「ま…だだ、まだ俺はやれる…！」

「…本当に忠実な使い魔を持ったね、ルイズ。
僕としても動けない相手をいじめる趣味はないし、いいよ、やめ
にじよひ」

「まだだつ！－！」

力強い叫びが、広場に響き渡つた。
誰も彼もが動きを止める。

サイト、お前…。

ギーシュは一瞬目を伏せて杖を振るつた。

花びらが一振りの剣となつてサイトの前に突き刺さる。

「まだやる気なら、取りたまえ。これは君への贈り物だ」

「とつちやだめ！ それを握つたら、今度こそギーシュは手加減しないわ！」

ルイズ嬢、止めても無駄だわよ。

ほら、サイトは荒い息を繰り返しながらも…剣をとつた。

ぼう。

ん？ サイトの左手が光つたよつな…。

「…なんだか判らないけど、力が沸いてきた。いける…」

「…?」「

そんな！

あんなに弱ってたのに剣を構えた！？

剣を握ったサイトは、別人のようなスピードで人形を叩き壊し、ギーシュに剣を突きつけた。

ギーシュ、ヴィリエの負けが宣言される中、違和感が拭えない。

何なんだ？

「サイト！」

つと、思考にふけってる間にサイトが倒れた！

無茶しそぎだ全く！

鞄からはちみつドリンクを取り出す。高価な回復薬だが仕方ない！

「ルイズ嬢、薬だ！これを飲ませてやつてくれ！」

「え、ええ！」

見る見るうちにサイトの傷が癒えていく。
ふう、これで一安心か。

「す、すつじい回復力…これとんでもなく高価な薬なんじゃ…」

「高いは高いが人命優先、気にするな」

ホントはヒールライトのほうが緊急には向いてるんだけどな。

でも大っぴらに魔法使つたら目立つし、仕方ない。

…でも何か別の意味で目立つた気がするのは何でだろう?

決闘？いや、はじめだけ！（後書き）

はちみつドリンク：

聖剣伝説3最高の回復薬。単体で999回復する。

ヒールライト：

回復魔法。効果は使用者の精神によって変動する。
イオはシャルロットと同じぐらい効果がある。

ハリセンで戦う元中ボス。
完全に遊んでます。

因みに竜帝は怒ったわけではなく、イオに発破をかけただけです。

盜賊騒ぎ（前書き）

追っ回した生徒は主にモンモンとタバサ。

決闘から五日経つた。

あの後あの秘薬はどこで手に入れたのか聞かれたけど、作ったと言つといった。

異世界産だなんて言つても信じてもらえないからな。
実際作れないこともないし。

そうしたらしつこく聞いてくる生徒が出てきたり、お前ら最初の怯えぶりはどうしたんだ、と言いたくなる。
因みに基本は誤魔化して逃げてる。

「」五日ずっと追いかけっこだ。疲れた。

「どうせ貴様は田立たないわけがないのだ。いつそ医者だと名乗り、
田立てばよいだろ？」「

「確かに医者と言えるけど

聖都ウエンデルは別に寄付だけで成り立つてゐる訳じゃない。
そこで高度な医療技術を学び、外で医者として出稼をするのも神官修行に入つてゐるのだ。

「あぐどいことやつてる奴もいたにはいたけど、そういうのはたい
てい自滅してたなあ。俺も潰したけど。

脱線したけど、俺はある程度以上の医療技術を備えてるから一応医
者とはいえる。

「でも微妙なんだよなー…」

「まあ、どっちにしろすでに目立つていいのだ。もつと派手な印象を植え付けてしまうのも良いだろ?」「う

学院の先生叩きのめしておいてよく言つ。

ギター先生だけ? プライドズタズタにされてたなー、片つ端から風魔法弾かれてたし。

風のスクウェアなだけに自信があつたんだろうけど、相手が悪すぎた。

竜帝は嫌らしくも風魔法ばかりで攻撃し、とどめにエアスラッシュヤー使つた時には、流石竜帝だと諦観しちまつた。

：中庭の地形がちょびっと変わっただけで済んだのは幸いだろ。

当然だが、その後竜帝の行動に文句言つ人間は俺たち除いていなくなつた。

噂では東方最強のメイジとか、実は人間の姿をしたエルフだとか言われてるし。

そんな訳で、竜帝は人のことをいえないと思う。

「あんた達、ここにいたの?」

「探したぜ」

ルイズ嬢にサイトじやないか。

仲良くなつて良かつたけど、何か用かい?

「べ、別に仲良くなつてないわよ! それより、出掛けたから準備

しなさい」

「？」

竜帝と二人、顔を見合せた。

「リュウウトイはこりないだらけだし、あんた達の武器とか買っこくのよ。あと、私の用事」

曰く、近々舞踏会があるから小物を買っこいくらしい。
…女の子の買い物って長いんだよなあ。シャルロットなんかすげく長かったし。

武器を買つてくれるみたいだけど、正直求めるレベルの武器があるとは思えない。
まづフレイルあるか怪しこし。それに…。

「残念だけど遠慮しておくれよ。一人でトートしておこで」

「でででトートですつてー?」

「うわ、わかりやす」。

サイドの方もほんのり顔を赤くしてこるし。

「テードだら。お兄さんほんとこで行つてきな」

「お兄さんつて…イオ何歳なんだ?」

「29歳」

「「嘘ー?」「

ハーフエルフは成長が遅いんだよ。
肉体的には15、6歳だが。

「ヒレオノールお姉様よりも上だなんて…エルフってみんなそういうの?」

俺は成長早い方だよ?

まあエルフが人間とは比べものにならない寿命を持っているのは否定しないけど。

「それはともかく、呆けてないで出掛けといで。お兄さんばっさいから」

「お兄ちゃんってこいつよつおじさんだろ」

うつさい。

そんなこというとハリセンで頭たたくぞ。

「もう、いいわよ! 行きましょうサイト」

そういって二人は去つていった。

いや、決して女の子の買い物面倒だとそういう理由で遠慮した訳じゃないからな?

……空しい。

*

時は過ぎて夕刻。

それまで何してたって？ 魔法の植木鉢を作つてた。

倉庫整理してたら、倉庫に武器防具の種とか魔法の種が大量に出できたんだ。 少しは入れてたけど、こんな大量は全く身に覚えがないんだが。

偉大なる元主様、おしえてー？

「ん？ …ああ、まだ我に忠実だつた頃に、ガラスの砂漠で狩りまくつてたぞ」

「何で？」

「知るか」

命令されてたわけでなかつたらしい。
まあ俺だし、多分モンスターがうざくてエインシャントあたりを連発していたのだろう。

…なぜ素直にテレポートしなかつたんだ？

何にせよ種が大量にあるのは良いことなので、本氣で植木鉢を作つてみたのだ。

この世界はマナが多いから楽だわ〜。
さてさて、早速何か植えてみよう！

ちゅぱじょあん！！

「な、何だあー!？」

慌てて辺りを見回すと、学院の塔の一間にひびが入っていた！

…あれやつたの、ルイズ嬢、じやないよな？

「む、あんな所に小娘の姿が」

「流石、悉く俺の期待を裏切ってくれるな竜帝

なんてこいつたい、流石に怒られるだけじゃ済まんだろう。アリシア。
声をかけるか否か…でも面倒事な予感。

すると。

「どーん!」という効果音がまさしく似合つ巨大な「ゴーレム」が出現した!
…え、どいつもことー?!

「泥棒だらう。確かあそこは宝物庫だといっていた」

ちよ、それまずくね?

しかもサイト達何か戦つ気だし!

ああもうー。

「イビルゲート！」

全てを飲み込む闇の渦が「ゴーレムを中心には生まれる…が詠唱破棄だ

と流石に全部消すとまで行かないか！

ゴーレムを半分飲み込んだところで効果が切れる。

しかし、それが嘘かのように瞬く間にゴーレムは再生した！

「どうやら土とつながる限り再生できるらしいな」

「面倒な…」

イビルゲートの上位呪文、ダークフォースの詠唱を始めるが、完成する前にゴーレムは何かを持ち去った！

なんつう逃げ足！

はあ。ダークフォースの詠唱を中断してため息をつく。

「絶対面倒事だ…」

我ながら運がないなあ。

竜帝は面白そうに笑つてゐるけど。

「いや何、思いの外貴様の慌てる顔が面白くな

こんなことなら操り人形にせずに最初から素で協力させればよかつた、と一人ごちた。

…畜生、あの時下克上しつければよかつた！

盗賊騒ぎ（後書き）

魔法の植木鉢：

種を植えると一瞬でアイテムが手に入る植木鉢。
宿屋に普通に置いてあるので知識があれば作れると捏造。

エインシャント：

無属性魔法。空から隕石を降らせるが、ここでは本物降らせるわけ
でなく、魔力で生み出した岩を降らせるものとする。
一応本物を降らせることは出来なくもない。

凄まじい破壊力を誇るがその分消費も大きい。何気なくイオの得意
魔法である。

イビルゲート：

闇の初級魔法。対象を起点に闇が全てを飲み込む。

ダークフォース：

イビルゲートの上位呪文。対象を闇に引き込み、全方位から攻撃す
る。

全体攻撃をするとエフェクトが派手になる。

エアスラッシュヤー：

風の神獣の必殺技。

凶悪な風は沈黙（詠唱不可）状態へ陥らせる。

本来の威力なら中庭が余裕で全壊するが、手加減された模様。

テレポート：

敵の幹部さんだけが使える転移魔法。

因みに、アンジェラも呪文を覚えればできただろう魔法である。
転移距離に比例して消費が大きい。

魔法に関しては基本ゲームですが、記憶が曖昧なところがあるんで間違つてたら指摘して下さい。

イオの年齢が明かされました、実は一歳サバ読んでます。死んでる間はカウントにはいるのか微妙ですが。

ちなみにギター先生はその長い鼻を叩き折つたら面白やうという理由で喧嘩ふっかけられました。
ここは竜帝フリーダムすぎる。

ギター先生に祝福あれ。

少し訂正しました。

破壊の杖を取り返せ！（前書き）

フーケ捕縛編。 捕縛…編？

破壊の杖を取り返せ！

おっすおらイオ！ … 電波を受信したみたいだ、忘れてくれ。

予想通り面倒事になつた。

学院の宝が盗まれたことで、急遽盗賊フーケ討伐隊が編成されたのだ。

その討伐隊のメンバーの中には、ルイズ嬢も入つてゐる。我らがご主人、ルイズ嬢が行くんだから当然使い魔も駆り出される訳で、今馬車に揺られる状況となつた。

知らんぷりしようかと思つてたけど、イビルゲートをばつちり見られてたもんに行くしかないし。

「…畜生、俺は回復しかやらないからなー」

「何でそんなに嫌がつてるんだよ？」

ただの理不尽な反抗心だ。要するに言つただけ。

そりやあまあ盗みは悪いことだ。

悪いことだけど…教師が討伐隊に参加せず、生徒だけつてのに納得がいかない。

見たところタバサとロングビルさんは中々やるようだけど、あとは

実戦経験なし。

歴戦の盗賊にこれは酷い。やる氣もなくすつてもんだ。

「それよりサイト、何で剣を一振り持つてるんだ？」

「あたし達のプレゼントよー。」

ほつほつ、モテ男の自慢かこの野郎。

でも…。

「「」うちの綺麗な剣、こりや飾り用の剣だな。実戦には耐えれないぞ」

「ええ、そんなことないわよー。千エキューもしたし、店主だって一杯褒めてたのよ~。」

「千エキューがどれだけの価値かは知らないけど、事実だ。
少なくとも素人に持たせるようなもんじゃない」

勝手に拝見しといて酷い言い草かもしれないが、事実である。
これが使うのがデュランだつたらマシだけど…いや、本人の性格上
使わないな。つかキレるな。

これでもう一つも酷いようだつたら、サイトは戦力外通告だが、さて。

「やるじゃねえかルフの兄ちゃん、あっさり剣の質を見抜くなんてよ」

「…喋ったー?」

鞄から抜いた瞬間、もう一つの剣が喋り出したのだ！

勝手に動き回る剣なら幾度も見たことがあるが、流石に喋る剣なんて初めて見た。

じつと剣を見つめると、何やら魔法が掛かっているのが判る。これが喋る正体か？

しかし。

「これ凄いな…所々錆びててボロいけど、手入れすれば十分使えるレベルだ」

「おうよ、このデルフリンガー様は守るための剣だからな！
その辺の剣と比べられちゃ困るつてもんよ…」

へえ、守りの剣か。

「その心、気に入った！
と言つわけでサイト、これが終わつたら『テルフ』といつちの剣の手入れな」

人から貰つた物は何であれ大切に。

しかし竜帝退治の時叩き込まれた知識が役に立つとは思わなんだ。

竜帝といえば。

「よくついてきたなー」

ふよふよと浮いている竜帝に問ひ。
つか、素直に乗れよ。

「…暇つぶしだ

ん？ 何か間があったような。

「竜帝、何か隠してないか？」

「…眞うほどのことではない」

「氣のせいだ。やつて竜帝はそっぽを向いてしまった。

「もうすぐフーケを撃した廃屋です。氣を引き締めて下さー

ロングビルさんが着めるよひで言つた。
すこませーん…。

馬車を降り、鬱蒼とした森を歩く。

暫く歩くと開けた場所にでた。廃屋がある、あれか。
だが人の気配がない。居るのか、本当に？

「作戦会議」

ちよこさん、ヒタバサが地面に正座した。そして枝を使って絵を描く。
ようやくあるといひだ。

囮兼偵察役が先行、フーケがいれば挑発して外にでたところを集中砲火。

いなければ合図、といつた真合だ。

で、その囮だが…。

「どうして俺を見るのかなみんな？」

「だつて… なあ？」

「紙切れだけでメイジを圧倒した。動きも早い」

「すごい魔法使うし」

「それにエルフなんだからどうでもなるでしょう？」

まさに集中砲火。ひでえ！

「俺は回復が専門なんだよ！」

「つべこべ言わずに行つてこい」

「げしつ！」と竜帝に蹴られた。

…覚えてる、種から良いもの出てもやらないからなー！

「つか… やつぱいなじやん」

小屋を覗いて誰もいないことを確認し、合図する。
みんな恐る恐ると言つた具合でやつてきた。

タバサは罠がないことを確認し、中へはいる。キュルケ達も続いた
が、ルイズ嬢は見張りをするといつて残つた。
ロングビルさんは見回り。

俺も見張り組だが… ルイズ嬢落ち込んでないか？

「どうしたのさへ。」

「…何

「落ち込んでるよう[に]見える」

ルイズ嬢はハツと目を見開くと、すぐに俯いた。

「別に落ち込んではないわ。だってフーケを捕まえればお手柄だもの」

「そうか？」

「氣のせいかな?」と、思い直すと、急に影が懸かつた。

…ん?

振り向くと、拳を振り上げているゴーレムが目に入った…ってええええ!

「ルイズ嬢!」

「きやああああつー」

間一髪、ルイズ嬢を抱きかかえて離脱。

しかしゴーレムは廃屋の屋根を破壊した模様。竜巻と炎が起こり、直後三人が離脱してきた。

「おおおお、降ろしてー！」

「あ、忘れてた」

ほい、ヒルイズ嬢を降ろす。軽くてよかつたよ。

そういうじてる間に「ゴーレムが距離を詰めてきた。すると、ぼんっ
!と一部が砕け散った。

背後から聞こえる声で、ルイズ嬢の爆発だと判断する。

「何してんのヤー。」

「あいつを捕まえるのー。」

そう言って何度も何度も爆発を繰り返す。
けれど少し削れるだけですぐ再生してしまう。

「ルイズ嬢、退くんだ!　！」は俺が何とかするからー。」

「それじゃ、あんたに頼りっぱなしじゃない!　私は貴族よ。

魔法を使える者を貴族と呼ぶんじゃない、敵に後ろを見せない者
を貴族と呼ぶの!」

そう言って詠唱した呪文を解き放つ　　また爆発。
ゴーレムとの距離はもうない!

「ああもう!ー。」

再び抱き抱えて回避!

殴られた地面が陥没して、間一髪だ。

「君、本当に心臓に悪すぞ……」

思いつきり脱力してしまつ。

竜帝はげらげら笑つてゐし……手伝えよ。

「う……めんなさい」

「何にせよ、怪我なくつて良かつたよ」

タバサの風竜がきたし、あとは任せよ。しかし、『コーレム』どうやってやつつけようか?

すると、竜帝が田の前に降りてきた。

「小娘の言葉と貴様の脱力ぶりが氣に入った。特別に我が木偶の坊をやつてやる」

脱力に着目すんな。つか、聞き違いじゃないよな?

「……貴様も対象に入れてやる」

「イエ、結構デス」

そのマナの集まりよつはあれだろ、神獣の一撃クラスだろ。そんなもん生身で食らいたくねえよ!

竜帝の周囲に集まつた膨大なマナが凝縮される。

「『ゴールドブレイズ』

ゴーレムが、凍りつき砕け散った。

破片から漏れる冷氣が肌を突き刺す。

その場の全員が息を飲んでいた。

…が、これも本来のものより威力が低い…いや、範囲を凝縮したのか？

少なくとも雪だるまにはなってないし。

「嘘やんじ無事ですか！？」

「ミス・ロングビル！ フーケはどうでしたか？」

「申し訳ありませんわ。流石名高い盗賊、逃げられてしましました」

「そう…ですか」

あ、ルイズ嬢また落ち込んでる。

元気づけようとしてか、サイトが明るく告げた。

「破壊の杖は取り戻したんだ！ 大手柄じゃないか！ …こんなもんがこんなところにあるのが謎だけど」

何かぼそっと聞こえたぞ。

かくして、盗賊事件の幕は下りたのだった。

破壊の杖を取り返せ！（後書き）

竜帝はきまぐれ。

まさかのフーケ未捕獲。まあ彼女もエルフが近くにいた時点で微妙に諦めてただろうけど。

精霊魔法>>越えられない壁>>系統魔法なのかな。

原作読んだの数ヶ月前だから忘れてしました…。

コールドブレイズ：

水の神獣の必殺技。食らった相手を雪だるまにする。

雪だるまかわいいよ雪だるま。

すぐ直るのでついつい放置が多かつた記憶が…。

不穏の陰（前書き）

武器防具の種、いいですよね。
ただ、ムーンハウバーが六回連續で出たときは泣いた。そんなにい
らん！

不穏の陰

破壊の杖を取り戻した翌朝。

昨日はパーティーと云つておいしい、飯を食べれたし、気分は最高だ。

そして今、植木鉢の前にいる。年甲斐もなく、ワクワクが止まらない。

倉庫から武器防具の種を取り出し、そつと植えた。

むくむくつ！

そして数秒後、あつといつまに花を付け、中心から一つの武器を吐き出した！

「おっしゃあああー！」

大成功！

知識はあつてもきちんと作れなきや意味ないもんなー。

早速創られた武器を手に取る。

「おお、流石に軽い」

武器防具の種で創られた武具は、使い勝手がいいんだよな。肝心の種は凶悪なモンスターが持つてるから普通は滅多に手に入らないけど。

「何を騒いでいるかと思えば… それはベルティナモールか。武器防具の種を使ったな？」

「だつて武器必要じやん。ハリセンは武器じやないし」

俺の主武装はフレイルなのだ。

剣なんて素人に毛が生えたぐらいしか使えないし。

それにもかかに楽しんでも良いじやん！

「思い出すな…貴様の妹はジャッジメントで我の鼻面を殴つてき
たことを。

む、腹が立つてきた。おーイオ、殴らせる」

「理不尽だー！」

「ふあ！

割と本気で殴りやがったな…頭痛ー…。

「ヒールライト」

優しい光が傷を癒す。

ん、流石俺、もう大丈夫だ。

頭殴るなよ全歼。

「…「ひむせこなあ、何の騒ぎだよ

テントからもぞもぞとサイトが出てきた。

「お前らが早いだけだろ…「ふあ

「おまよつカバイト、今日も遅いな

まあ、生活習慣だからな。

それより昨日は良かったな、ルイズ嬢と踊れて。

「でも、最初に誘われたのはイオだろ？ 良かったのか断つて」

「サイト、良いことを教えよ。俺はダンスすると、怒られるんだ」

「はあ？」

「いや…きみんとステップ踏んでるまんなのに足を踏んじやつたりなんてザラで。

妹と弟に特訓して貰つたけど直る見込み一切なし。

妹になんかもう踊るなーと叱られたな…

酷いぜシャル…兄ちゃんはせせんと特訓してたの。ヒースも苦笑してたし。

「…苦労してたんだな。つか、兄弟いたんだ」

「可愛い弟妹だ」

ヒースに身長抜かれたときは号泣したが。

ちなみに、俺はサイトよつちよつと背が低いぐらうだ。ちよつとだからな。

「…ふう」

「…笑うなつか心読むな

*

あれから数日後。

今日も今日とて暇だ。

基本、使い魔は主人と一緒に行動するのが常だが、その辺はサイトに任せつ放しな俺らである。

竜帝はふらりとビックへ行くし、俺も探検と称して空の旅を楽しむことがある。

主教に教わった飛行術がここで役に立つとは思わなんだ。
主教は使いすぎだけど。

ん、主教の名前？ ノーロメントで。言つたらどんな呪いがくるか
わかったもんじやない。

ふわふわ浮いていたら、何か派手な馬車が遠くに見えた。
結構な上空で見てるから距離感が掴めないけど、数時間後に学院に
やつてくるっぽい？

…あれ、俺やばくね？

学院では付け耳だとかエルフらしくないエルフだと散々言われて
るけど、一応なじんでる。

だが外となると…最悪、その場で戦争になりかねないかも？

大慌てで学院へ戻る。

そしたら、なんか変な風にめかし込んでるゴルベール先生に出会った。

「やあやあイオ君！」

「ゴルベール先生、おめかししてるけどひつたんですか？」

「ああ、急にとある尊き方々がやつてくることになつてね。

ああそうだ、君は出来れば隠れてもらえないかい？ 学院ではもつれほじではないけど、エルフはあまり印象よくないからね」

尊き方…。王族かなんか？

どちらにせよ見つかれば面倒事は避けられない。

ゴルベール先生にしつかり頷く。

わて、エリヒに隠れよう。

「とづくわけで助けてシルフィー！」

「ええい！？」

結局、戻つてタバサの風竜、シルフィードのところへ隠れるにした。

驚かせちゃったかな？

「ええいきゅい！」

「いだつ…？」「めん、悪かった、怒らんで…」

ベジベシヒロで呪かれた。

出でこけつて」とつぽいが… ももこももこじやわからん。
それにして…。

「シルフィって可愛いな」

いやねや、ドラゴンなのにここに可愛い。

元の世界のドラゴンには良い思い出があんまりないが、この世界の
ドラゴン… つかシルフィは好きだ。

つぶらな瞳！ 青い鱗！ 立派な翼！

ビーバーの竜帝とせばべるものにならん位可愛い。
まああれはどちらかといつと格好良い、恐ろしいが先に来るし。 …
そういえば最近本性見てないな？

シルフィの顔にもたれて、空を見上げる。諦めたのか、もう抵抗はない。

「……真つ正面から可愛いなんて、照れるのね」

ん？ 誰か喋った？

わよわよわよわよと見回すが、気のせいかな。

それにしても… 聞くなつてきた。

「ももこ？」

「「めん、ちよつと寝かせてー…」

かくんと、意識が沈んでいくのを感じて、俺は眠りについた。
何故か懐かしさを感じて。

…目が覚めた後、再び面倒事になるとは思わずには。

不穏の陰（後書き）

シルフイ好きすぎる。
さて、どうしてイオは懐かしさを感じたのでしょうか。

ベルティナモール

武器防具の種で手に入るフレイル……と言つていゝのか不明なぐらい
攻撃力の高いフレイル。

一応手に入る中では最弱なのだが、普通の武器とは比べ物にならぬ
いほど性能がいい。

ジャッジメントス：

プリーストが装備できるフレイル。一応メルティナモールよりは威
力が高い。

これらの装備はあくまでモンスター対応で、人に向ける装備では
ない。

イオのクラスが謎すぎる……。

設定しといてあれですが、元クレリックレベルじゃないぞ貴様。

拉致られて白の国（前書き）

まさかすぐ死れる人物が登場。

拉致られて白の国

突然ですが、拉致られました。竜帝に。

シルフィイの体が思つたより寝やすくてついつい爆睡してたら、叩き起こされ行ぐぞの一言。どう思つ?

體を引締めるもやなく、あゝと詫へ間にテレホー
ソしてついたのせゞにかの城とおぼしき場所。

：どういう状況だ？

やつてきた文官らしき人さらに混乱。えつとつまりな。

「状況を説明しろおおー！」

かくかくじかじかで文官さんが話してくれた事によると、ここはア
ルビオンらしい。

空に浮かぶ白の国で、さりに言つと大絶賛戦争中の国だ。

で、何故俺が呼ばれたのかは知らないらしい、と玉座へ向かうまで
に教えて貰つた。

今いるのは玉座への扉の前だ。

白く美しい、莊厳な扉を竜帝は遠慮なく開いた。

「連れてきてやつたぞウエールズ」

「ああ、ありがとリュウティ殿。しかし彼は…本当にエルフじゃないか？」

そう言つて現れたのは金髪の整つた顔立ちの、いかにも王子様といった風貌の青年だった。

当然だが警戒されている。

「…どうも、昼寝してたら拉致られましたハーフエルフのイオです」

「ハーフつー？」

何か水をふっかけたような騒ぎになつた。

ルイズ嬢の反応もこんな感じだったな、懐かしい。

「静肅に！ 王の前ぞ！」

宰相らしき人の一声で玉座の間は静まり返つた。

ただ、睨みつけるような視線じゃないが、何か粘つこい視線がくるのはちょっと…。

居たたまれなくなつて竜帝に視線を向ける。

「竜帝、いきなり拉致つて何の用だよ本当に」

「すみません、イオ先生。俺が無理を言つたんだ」

「！？」 いの声！

慌てて声のしたほうへ振り返ると、真っ赤なマントが目に入った。紅蓮の炎のような赤色。

それを身に付けてるのは。

「紅蓮の魔導師！？」

「久しぶりですイオ先生」

かつてアルテナ最強と謳われた紅蓮の魔導師その人だった。だが彼はテュランとの決着をつけて自爆して死亡した筈だ。どうしてこんなところに…まさか！

「紅蓮さんも光の帯を通ってきたのか？」

「いえ、何もない空間を漂っていたら引っ張られて…ここにいるウエルズ皇太子達に救われました」

そういうて紅蓮さんはばつが悪そうに俯いた。

「…あの日は本当にすみませんでした」

「あの日？…ああ」

食われた日か。とは口に出さなかつた。

「そりやあ何で俺が、とは思つたけど気にしないよ。気にする暇もなかつたし」

主に隣にいるアリランのせいで。

まあ結果的に生き返れたし、何より紅蓮さんが元に戻つていて嬉しいな。

最後に見たのは人形みたいな無表情だったし。

「それで、ここに呼んだ理由は何？ 確かこの国は戦争中だつたと思つんだが」

「やうだ、戦争だ」

心底楽しそうに龍帝が言った。
…まさか。

「戦争に参加させる気か？」

「いや、紅蓮の魔導師を見つけたので会わせてやねえと思つただけだ」

「龍帝様が城に乗り込んだときは何事かと思つましたが…」

がくつ！

いや、戦争に参加しないじゃなくて良かつたけどー

つーか何してんのだ龍帝ええ！

「じゃあ何で俺を呼ぶのにこんなに仰々しいんだよ…」

「紅蓮の魔導師殿には世話になつぱなしでね。私も王も魔導師殿

の師となると「J無礼できないんだよ」

「……紅蓮さんこの国で何したのさ。つか俺は師匠じゃない」

「取り合えずマシンガーレムを試作したり、反乱軍を蹴散らしたりなどを」

そう言えば紅蓮さんフォルセナ城陥落寸前にしたんだっけ…。

どこか遠い田をして紅蓮さんの話を聞く。

「あの『一ノ郎』はすごい！ たかが一
あつと言つ間に蹴散らしましてな！」

「魔導師殿も我々が見たこともない魔法で反乱軍を一掃したり、大活躍でした！」

べた褒めである。

紅蓮さんが、ちよいと戦争終わったらじっくり話しあおうか。

「もうひと頑張りすれば反乱軍を鎮圧出来る、と言つたところで竜帝様に再会しまして。

イオ先生も一緒にいるから、つい竜帝様に頼んでしまいました」

「…もう何も言わんよ」

頭が痛い……。紅蓮さんってこんな性格だつたか？

テレポート使って帰ろうかと思うと、にっこり良い笑顔の皇太子が

そこにいた。

「是非ともおもてなしをしたいんだ。泊まつていいくと良い」

「…あの、俺ハーフエルフなんですよ？ 半分は貴方達の嫌いなエルフ」

「紅蓮の魔導師殿の師匠なんだ。悪い人であるわけがないよ

だから師匠じゃないんです。

ちょっと精靈を訪ねて力の使い方を教えてあげただけなんですけどー！

「それに、貴公の話はかねがね聞いている。ああ、勿論魔導師殿からね。それに」

異世界の者だと云ひ「ともばっちりね」と囁かれた。…紅蓮さんどこまで話してゐるや。

結局異世界の王族に対する拒否権はなく、なし崩しに王城に泊まることになってしまった。

帰つたら怒られるよな…はあ。

翌朝。

いつも通りほほ田の出に起きた俺はいつも通りお祈りをする。女神様、今日こそは帰れますよ！」

ルイズ嬢達のお怒りが怖い。

やること特にないし散歩でもするか？

と、考えていたらいきなり竜帝がやってきた。テレポートすんな心

臓に悪い！

「ふつふつふ。散歩と称して外へ行く気だろ？」

バレてーら…。しかし、早起き珍しいな。

「ん？ 少々熱が入つてな、敵の飛行船を落としていたら朝になつてただけだ。」

戦争満喫してやがる。

敵さんご愁傷様…冥福を祈つといつ。

つて、おかしくないか？

「時間掛かりすぎじゃん。本来の姿ならそれこそ一瞬で終わるんじや」

「…言つてなかつたな。何故か戻れんのだ」

え？

「嘘だろ。竜帝サマがドラゴンに戻れないなんて」

「笑えない冗談だが、事実だ。今は力が制限されている」

このルーンのせいか？と竜帝はつぶやいていたが俺にはそんな兆候全くな。

マナだつて最高に満ちてるし、むしろ死ぬ前よりも調子がいいぐらいだ。

けれど竜帝の体には制限が掛かってる…謎だ。

朝食に呼ばれるまで竜帝の体を診たが特に異常はなかつた。
どういふことなんだろ？

拉致られて白の国（後書き）

といつわけで紅蓮さん（本名不詳）登場。これでパーティ組めますね！

紅蓮さんも性格捏造。敬意を払うのは恩人と上司と師匠のみで、基本はゲームの高慢ちきではあります。

紅蓮さんのステータスもほぼボス戦と同じ。
よく考えたら…こいつら近接担当いねえええ！

マシングゴーレム：

アルテナが誇る魔導兵器。紅蓮さんは知識だけ持つて自分では作れないという設定。
土メイジが部品を組み上げ何とか旧スペック（HOMぐらじ）レベルまで汲み上げた。

操縦者いらず、単体でかなりの広範囲を攻撃できる上頑丈。

因みに紅蓮さんは単体で攻城戦ができる（主人公がデュランの場合
参照）

紅蓮さんは大砲、竜帝はただのラスボス、イオはバランス兼回復役
というパーティ。あれ一名おかしい。

紅蓮さんがそこまで信頼されている経緯はまた次回。

追記しました。

紅蓮の道程（前書き）

今回は紅蓮さんの昔話。 タイトル変えました。

紅蓮の道程

私は夢を見ているのだろうか。

かつて圧倒したはずの傭兵は、私が師と仰ぐ人を打倒してきた。そして、今私さえも圧倒している。その事実に少なからず動搖している私がいた。

どうして負ける…？

師を生け贋にした日に私は絶対の力を手に入れたのだ！女王にも、王女にも負けない圧倒的な力を！

(これで私達、もう馬鹿にされないわね！)

王女の声が脳裏に甦る。

…いつした話だったかな。もう一年は前の話か。

ずっと憧れていた魔法の力を、精霊の補助で発現できた日だったか。

王女の身に宿る力は莫大で、私はちっぽけな存在だったのを思い知らされたな。

竜帝様の誘いに迷わず乗ったのはそのせいだったと思つ。

…ああ、もう記憶はこんなにも曖昧か。

蘇つた師と違い生身の私は回復手段さえ持たない。

回復はできない。だがあの傭兵はとどめを刺そうともしない。いつそ恐ろしいほどのまっすぐな目で私を見つめていただけだった。

勝者の情けか。だがそんなものはいらない。

戦えないのなら、私にもつ価値はない。

小さく、小さく呪文を唱える。あの傭兵が気づいた瞬間、呪文が発動し私の体は爆炎に包まれる。

“まあみる。貴様などに情は賣わん。

そう思ったのが最後、私の意識は完全に途切れた。

それから幾時が過ぎたのだろう。

何も感じなかつた意識が突然戻つてきた。

どこを見ても何もない空間で、ただひたすら漂つていたらしい。らしさといつのは、戻ってきたとはいえ未だに意識があやふやだからだ。

主とあの傭兵達はどうなったのだろう。

ただ判つているのはこの空間に終わりがないことぐらいだ。

私はこのままここを漂い続けるのだろうか。
師匠もここにいるのだろうか。

ぼんやりと考へていると、急に何かに引っ張られた。

何だ、と考える暇もなく引きずりこまれ、地面にたたきつけられる！

「ぐあっー。」

相当の高さから吊りつけられたようだ。
痛い　と考へて違和感を覚えた。

私は死んだはずだ。肉体の感覚があるはずがない。

だが現実として叩きつけられた身体は痛みを訴えている。
回復魔法を、と考えたが自分には使えないことを思い出した。身
内で使えるのは師ぐらいだか、都合よく居るはずもなく。

(こんな訳の分からぬ状況でまた死ぬのかー？)
死んでたまるか、と歯を食いしばったとき。

「　大丈夫か？」

救いの手は、現れた。

アルビオン王国皇太子、ウェールズ殿下とその配下だった。

彼らは親切にも傷つき倒れていた私を手当すると、王城へ連れて行
つた。

そこで交わした会話で、私は異世界に来たことを認識させられた。

レモン・キスタとやらの兵だと思われていたことも判つたのだが
それは割愛しておく。

異世界など来たことがないからどうすればいいのか判らなかつたが、
幸いこの世界も魔法があつた。

とにかく身分の保障を求め、魔法の実力を認めさせ、セラヒマシン
ゴーレムの設計図も起こした。

内乱中だといひこの国で、信頼を得るため一兵卒として戦争にも加
わつた。

竜帝様に賜つたこの力は異世界に来ても衰えはなく、ただの人間な
ど塵のように吹き飛ばした。

…神官だつた師匠が見れば怒られるだつうが、生きるためだ、後悔
などない。

最初は疑念しか向けられなかつた田も、少しずつ信頼と恐怖を交え
るようになつた。

毎日が充実していいたと自信を持つていえる。

気がつけばウエールズ皇太子とは、異世界出身であるといひことを
明かす仲にまでなつていて。

最初は王家に身分を保障して貰つだけのつもりだつたのにな。

そして内乱はほとんど鎮圧し、あとは仕上げばかりになつた。

そんな折だつた。

「 む、紅蓮の魔導師か？」

「竜帝様！？」

ニコーカツスル城へ現れた不遜の輩。

それを退治するために赴いたとき、そこにいたのは我が主竜帝様だった。

主は退屈しのぎにやつてきたと言つた。

遙か遠いトリステインには師匠もいるらしい。

なんという巡り合わせか。

初めて女神に感謝したかも知れない。

主は本当に退屈しのぎでやつてきたらしく、私がこの城を守つてゐることを伝えると、つまらないそつに攻撃をやめてくれた。

代わりに内乱中であり、アルビオンの周りには敵しかいないことを伝えると、主は愉しげに協力してくれると仰られた。

そして国王達に主の紹介を済ませ、数日が過ぎた頃。

主は急に師匠を連れてきた。

私が以前こぼしたこと覚えていて下さつたらしい。

数ヶ月ぶりに出会った師匠は生前のままだった。彼も甦つたらしい。

「お久しぶりです、先生」

師匠は『師匠』と呼ばれるのを非常にいやがっていたのを覚えてい

たので、妥協する。

師を怒らせれば怪しげな薬の実験企画されかねないからな。

久しぶりに会った師匠は、あの一年間のことと微妙にしか覚えてないらしかった。

師匠が主に甦らせられた直後の苦に記憶を掘り返せずに済みそうだ。
良かった。

…今だから思うが、あのときの自分は本当に調子に乗っていたしな。
師匠に徹底的に呪きのめされていなければ、あの彌々しい勇者共に
瞬殺されていたぐらいに傲慢だった。
本当に良い師匠を持った。

ただ、幾ら自分が力を得るためとはいえ、師匠を生け贋にしたこと
は後悔していた。

以前、そのことを謝る機会は全くなく（師が自我を取り戻した直後
ウェンデルへ行ってしまったこともあって）それだけが棘のように
突き刺さっていた。

だが、それも今日で晴れた。

師匠たちは王子の勧めで泊まることになつたし、話をたくさんした
い。

…どうとなくいやな予感もあるが、それでもながら宴の準備もして
もらおう。

そりゃあ師匠は下戸だったよつたよつた。

ジユースもあればいいが。

紅蓮の道程（後書き）

紅蓮さんがここに来た経緯を大ざっぱに綴つてみました。
相変わらずの性格捏造。

紅蓮さんのやつたこと：

- ・マシンゴーレムの設計図を描く
- ・戦場でレコン・キスタを叩きのめす
- ・ウエールズ皇太子の恋の悩みを聞く etc.

因みに、紅蓮さんとイオががちでやり合つとイオが圧勝します。
回復・補助魔法というアドバンテージは偉大。

本領発揮！（前書き）

今回やうじつと残酷かも。

本領発揮！

イオだ！

朝食を食べた後も竜帝の身体を診たけど、原因不明すぎる。一応あらゆる呪術修めてるんだけど、どうしようもない。

紅蓮さんはすでに知つてたらしに。

この手の専門家の俺に何故聞かなかつたと突っ込みを入れたいが、紅蓮さんは竜帝至上主義なのでどうせ聞いてくれないだろう。昨日の説教だけじゃ足らなかつたか…。

紅蓮さんにどうやって説教をしようかと考えてると、ウホールズ皇子に声をかけられた。

「イオ殿、少し頼みがある。貴公は優秀な治癒術士ときいてる。此度の戦争で傷ついた者を手当してやつてくれないか？」

「ん？ ああ、いいですよ」

忘れるところだつたが戦時中だつたな。
しかし王族が使い走りつてどうなんだろ？

皇太子に案内され、救護室っぽい部屋へ辿り着く。予想していたより怪我人が少ない。

「これだけですか？」

「ああ、紅蓮さんのおかげで随分楽になつてね。彼には感謝しても

しきれない」

下手すると王国軍は敗北していたからね、と皇太子は呟いた。よほど苦しい戦況だったのだろう。

応急手当の上にしつかりした処置をしつつ、皇太子の話を聞く。

今日の戦いで決着が付くかもしれないらしい。

昼頃出陣で、皇太子は緊張を解すために俺をここに案内したらしかった。

ヒールライトと薬を併用する手当を、皇太子は興味深そうに見ていた。

「私達の魔法で言えば、治癒は水メイジが専門なのだが、そちらは光なのかい？」

「昔はヒールウォーターってのもあつたらしいですよ。ただ、今は回復と言えば光が主流ですかね」

「ほう。紅蓮さんは攻撃的な魔法しか使えないようだつたけど、他にもあるのかい？」

ありますよー。

俺たちの魔法は八属性あつて、素質があれば個人の波長にあう属性が使える。

例えば俺は、地水火風とはあまり相性がよくない。

使えるのは精々セイバー魔法ぐらいだが、光と闇に関してはその逆に吸収してしまうぐらい相性がいい。

月と木もまあ相性は良い方だ。この二つは補助的な面が多いけど。

簡単な説明をすると、皇太子はさうに田を輝かせた。

「素質があれば誰でも使えるのか。では私にも使えないかな?」

「どうでしょうね? 精霊達がいれば教えてくれるんですが…」

八精霊はもういない。マナが消えると同時に消えてしまった。
だから精霊魔法が使えるかなんて あれ? おかしくないか?

精霊がいないなら何で魔法が使えるんだ?

確かに最終決戦でテュラン達は魔法を使った。だがあれとは状況が
違います。

…恐ろしい考えが過ぎった。『マナ』とは何だ?

身近にあって当然だと思っていたのに、今は酷く得体が知れなく、
恐ろしい。

「イオ殿?」

「…つ! 少し考え方をしていました」

今は深く考えないじゃ。柄にもないが、怖い。

何も考えないよつて、治療に集中しよつ。

その甲斐あつてか、負傷者は幾分か戦線に復帰出来るよつになつたが…心は晴れなかつた。

はあ。

こう、頭使うの苦手なんだよな~。
なんかこいつ、すかつとしたいんだけど…そうだ!

「皇太子殿下、お願ひがあります」

とこつわけで、紅蓮さんの護衛をすることになつた!

え? 何がとこつわけであつて…暴れるためだ! 殺しあはしないつも
りだけど。

フードを被つて意氣込んでいると、紅蓮さんが心配そうに見ている。

「大丈夫ですか?」

「大丈夫さー それより怪我するなよ、治すの面倒なんだからな

軽い調子で言つてやると、紅蓮さんは誰に言つてるんですか、と毒
づいた。

今回の作戦は単純だ。レコン・キスタの頭領が籠城しているどつか
の町だつたかを、地域住民の安全を確保しつつ取り押さえる。

だが住民は基本退避済みだ。故に暴れることに関しては余り問題が

ない。

突入部隊としてマシンゴーレムを使い、メイジが追い打ちをかけて一気に落とす。これが作戦の全貌だ。

航空戦力は竜帝が根っこを刈り取つてゐるからな、連中は逃げれない。

紅蓮さんはマシンゴーレムの全体指揮だ。

で、俺は万一千接されたときの護衛扱いして貰つてる。万が一もな
いと思うが。

「マシンゴーレム、突入！」

紅蓮さんのかけ声とともに、今までゆっくりだつたマシンゴーレム
達が城へ突入する。
それからは一方的な展開だ。

ロケットパンチやら電撃やらが飛び交つて、あつと言ひにメイジ
達を蹂躪していく。

思わず眉をひそめたが、戦争だ仕方ない。冥福を祈るべ。
ゴーレム達によつて軍はあつと言ひ間に進軍し、実にあつけなく城
を包囲した。

…あれ、俺出番なくね？

「行くぞ！ 今こそ我々の手で反逆者どもを討ち取るのだ！」

「「おおーっ……」「

ウェールズ皇太子のかけ声で一気に突入。本気で俺いらないな！？そのまま制圧かと思われたが、そこで歯車が狂った。

「なつ、マシンゴーレムが！？」

城に突入したマシンゴーレム達が矛先を変えたのだ！その凶弾は最前線にいた俺たちに集中する！

「イビルゲート！」

とつやに闇を生み出し、攻撃を吸収する。

「どうなつてる？ まるで魅了でも掛けたみたいだ！」

「その可能性が高いです！ マシンゴーレムは設計上、味方に攻撃するにはあり得ません！」

そう言って紅蓮さんは敵となつたマシンゴーレムを焼き払う。後ろの軍はシールドを張つて堪えてるが、こつまで持つか怪しこよひがない！

紅蓮さんも同じことを考えたようだった。

「Hインシャントで一掃するか

「ですね。ゴーレムは作り直せばいい……」

ちよこと氣が引けるが、Hインシャントを同時詠唱する。

一重一重と重なる詠唱を止めようとマシンゴーレム達がやつてくるが、残ったゴーレム達で時間稼ぎをする。

だが俺たちの高速詠唱を邪魔するには程遠いっ！呪文が完成する！

「星よ来たりて敵を討て！ エインシャント！..！」

古代語呪文のエインシャントは、相乗効果を持つとして、凶悪と言つていい威力でゴーレム達を葬り去る！

・ 対象をゴーレム達に絞つてなきやこの辺一帯が更地になつてたな。

とにかく、ゴーレムの脅威は去つた！

けど、マシンゴーレムに黙祷。オーバーキルすぎたな、跡形もないし。

城内制圧はスリープフラークにしよう、うん。

しかし、さつきのゴーレムの反乱は一体どうこいつになんだらう？

数刻後。

皇太子に進言して、制圧作戦はスリープフラークを使うことになった。

こっちにもスリープクラウドというのがあるらしいが、使い手が余りいないらしく。

俺の使つたスリープフラークは風メイジの力を借り、城内へ眠りの

花粉を撒き散らした。

最初から使えって？

アルビオンは風が強いから対象を定めてても味方に被害がくるんだよー。

進軍途中で一人でも寝こけて見ろ、ドミノ倒しだ。王国軍つていうのは妙に綺麗に隊列つくるからなあ。

とつあえず、寝こけてる兵士達を縛りながら進んでいく。
卑怯？ 気にするな！

頭領さんはどこかねえ？

きょろきょろと適当な部屋を覗いてみる、

「つー

とつさに首を傾げると、風の刃が真横を通った。
寝ていない奴が居たのか！

持っていたベルティナモールをとつさに振るう。

がごんつ！

ちょっと人体の奏てる音じゃないぞ！？

しかしへルティナモールにぶちあたつたメイジは一瞬で床に崩れ落
ち 立ち上がった！

「なつー！」

ゾンビが何かか！？

しかし今は真っ昼間な上、闇の力など微塵も感じない。ゾンビな訳がない！

しかしそンビもどきはベルティナモールをがつしり掴む。仕方ないので肘鉄を食らわし、ぶつ飛ばす。

だが活動を止められるほどではないか…。一応試すか。

「ターンアンデッド」

手の平を向け聖なる波動を解き放つ。

アンデッドなら一撃で昇天可能な魔法だが…どうだ？

ゾンビもどきはまるで糸が切れたかのように倒れた。一応効くらしい。

体を調べたがやはり死体だった。くそ、冒涜だ。頭領は頭いかれでんのか！

あんなのが他にいたら面倒だ。さつさと頭領見つけてふん縛りつ。

「紅蓮さん… ジー任せたぞ…」

言い逃げして無人の廊下を突き進む！

悲鳴や怒号が聞こえる。他の所もずいぶん苦戦しているらしい。まあ紅蓮さんがいるし、よっぽど大丈夫だろうが。

取りあえずもどきを見かけてはターンアンデッドを繰り返し、昇天させな。

何というか…作業だ。後でちやんと弔おう。

随分高い階までやつてきたと思つが、頭領っぽいのいないな。逃げたか？

ガシャーンー！

近くでガラスの割れる音がした。
そこか！？

フードを押さえつけながらも必死で走り、扉を蹴り破る！

だがそこには血塗れの男性が一人、倒れていただけだった。

慌て脈を確かめたが　死んでる。酷いな、首を一掻きか。
大方同士討ちか？　何にせよ胸くそ悪い。

やがてウェールズ皇太子による勝利が宣言され、レコン・キスタは壊滅した。

だが何だらう、この不安は？　いやな予感がするな…。

本領発揮！（後書き）

いろいろと酷いレコン・キスタ打倒編。中ボスの力の片鱗がここに！

対象云々について：

ゲームでよくあるあれです。基本的に狙いはつくけど、周囲の影響が余りに強いと狙いがそれるという設定。

特にスリープフラワーはマップ全体に眠りの花粉によく似た魔力をばらまく魔法と考えており、耐性があろうとなからうと眠つてしまふ設定。

一応対象設定はできますが、三人パーティのような少人数はともかく、軍のような大勢で攻める時の魔法としては不適切かと。気心のしれた三人パーティの連携ぐらいなければ完全に回避することは不可能。

さらに範囲広げすぎると威力も落ちるので、城みたいな密閉された空間じやないと効果のほどは期待できない設定もしています。

逆にエインシャントみたいな降下魔法は、あくまで降らせせる魔法なので対象設定がしやすい設定です。威力は範囲によって変動、しかし魔力消費を大きくすれば威力そのままに範囲をある程度広げられると捏造。

今回捏造多いな！

スリープフラーー：

木属性の眠りの魔法。眠りの花に非常によく似た魔力を流し、相手を眠らせる。人形だろうと何だろうと関係なく、意志ある者に眠気を誘う。

魔法耐性の強こものなら拒むことができる。

原作ではマシンゴーレムをえ眠らせる魔法ですね。ほんと、お世話を
になりました。○
ン

ターンアンティックド：

名の通りアンティックド 殲滅魔法。魂を冥界へ送り返す。
高位の神官なら習得できる。

今回やけっと残酷描写がありましたが、大丈夫でしたか？

しかしあントバリの指輪の効果（死者を蘇らせる）に対するはターンアンティックドよりアンティマジックの方が良かつたかな…。曖昧な判断ですいません。

戦争終了と結婚式…？（前書き）

アルビオンから帰還。

今ならセシトで紅蓮さんもつっこひえます。

戦争終了と結婚式！？

護衛といつも田で参加した戦争は、非常に少ない被害で終結した。途中から護衛放棄したけど！

そういうば、血塗れで倒れていた男、どうやらアレが頭領だつたらしい。

元ブリミル教の司祭だつたといつ。皇太子は色々愚痴愚痴言つてたが、とりあえず器が小さい男だつたのは判つた。

でも何で殺されたんだろ？

そんなことをボーッと考えていると、突然耳を掴まれた。そして引っ張られる！つて待て！？

「あだだだーー？」

「何やら随分悩んでるではないか、イオ」

「痛い痛い！耳とれるー！」

どうにかして竜帝の手をはがそつとして、びくともしない。畜生。

「いい加減に…しきつーー！」

「む

ベルティナモールを振るつと、流石に竜帝も逃げた。ふう、助かつた。

でも痛かつたから睨んでやる。

「何してるんですかお一方……」

紅蓮さんも呆れ顔だ。

俺は悪くないぞ、竜帝が悪いんだからな！

じつと睨んでやつたが大した効果はなく、竜帝は欠伸しだす始末。おい、反省しろ。

そこまで考えると、不意に竜帝の手に目がいった。手といつか、正確には指先の指輪。あんなのしてたっけ？

「竜帝、その指輪どうしたんだ？」

「その辺の人形から拾つた。なかなかの力を秘めていたのでな」

そう言って面白やうに指輪に目を向けた。

碌な事にならんといいが。

あ、そうだ。

「紅蓮さん、そろそろ俺達帰るよ。向こうに心配かけてるだらうし

……」

濃い数日だったなあ。もつ何ヶ月か経つたかと思つたよ。

「なら私も行きます

……ん？

耳が遠くなつたかな……。

「本気ですよ？ 重要な案件の時には戻つてきてくれと誓ひ殿下の了承も得てます」

「齎したる」

「よくお分かりで」

ダメだこいつ、すでに手遅れだ…。

大体どうやって連絡取るきなんだ、テレポートか？

世話になつた人々に挨拶をして、エントランスまで見送られる。

「テレポートなんぞ見送らなくていいのに…」

「何、形だけでもという奴や。また遊びに来てくれ、歓迎する」

そつ言つて皇太子は爽やかに微笑んだ。
そうですね、いつかかならず。

ペコッと礼をして、テレポートを発動した。

景色が変わつた。白い城壁から緑溢れる森の中だ。

近くにはテントがあるし、間違いないトリストイン魔法学院だ。

懐かしいなあ、そんなに離れてた訳じゃないんだが。

「……イオ？」

お、この声は。

振り向くと予想通り、黒髪の少年 サイトがいた。
でもなんか様子がおかしい。

「…ただいま？」

「イオだあああーーー！」

勢いよくぎゅう、と抱きつかれた！

ちよー？ 僕にそんな趣味はないぞサイト！

つてあああー 紅蓮さん呪文詠唱始めるな！

エクスプロードって生身の人間に向けるもんじやないからー！

とつたに倉庫から適当に何かを投げつけた。
“ず”“じん”“とほ”みつ“ド”“リ”ンクのビンが命中して、紅蓮さんは倒した。

…死んでないよな？

びくびく動いてるから大丈夫としよう。…流石に後で治療するか。

「で、どうしたよサイト」

「ルイズが髪といぢやこらしててえ…髪はバカにした田で見てくる
し、ひつぐ、俺なんて俺なんてえ…」

おつけ、判った。酔つてんなこの野郎。
でも髪つてなんだ？

酔っぱらこほど面倒な者はない。相変わらず抱きつかれたままで懶

陶しいので、スリープフローを使つ。

当然ながらサイトはあつさりと意識を失つた。
しかし…。

「髪つてなんだろな？」

「知るか」

サイトを地面におことつて、紅蓮さんの治療に取り掛かる。
でつかいたんじぶになつてた。…後で謝るつ。

さて、サイトと紅蓮さんをテントに置いて散策しよつ。

え、サイト危険？ 紅蓮さんを「沈黙」させたから問題ない！
簡単に言つと、俺達が戻るまで詠唱どいろか魔法の発動さえ出来ない呪いをかけてやつた。置き手紙はおいたので大丈夫だ。

まずはルイズ嬢探さないとな。

「シエスター、ちよつとこい？」

「あれ、イオさんじゃないですか。お久しぶりですね、今までビーハー？」

「ちよつとアルビオンへ。それよつて、サイトが落ち込んでるんだ
けど何があった？」

尋ねると、シエスターはちよつと困つた感じで周囲を見回した。

「　実は、先日王女殿下が学院を訪れまして」

「ゴルベール先生がめかし込んでた日か。
シエスタの話を聞く限り、別に王女殿下が話の焦点ではないらしい。

魔法衛士隊隊長、ワルド。ルイズの婚約者とか。
田ぐ金の髪が眩しい美丈夫だそうだ。髪つてそれか。

「つまりサイトは失恋か？」

「多分…」

シエスタ複雑そうだなあ。

何せこの黒髪の少女はサイトに惚れているのだ。

当の本人はルイズ嬢に自覚なしの恋してるっぽいし…やれやれ。

「人間は面倒だな」

「半分エルフとしては同意するけど、そういうってやんな。人間って
のは面倒くさい生き物なんだよ」

俺みたいな半端者が何を言いつかって話だけど、人間はそんなもんだ。

「大体判った。じゃあルイズ嬢知らない？」

「ミス・ヴァリエールなら多分応接室です。ミスター・ワルドとお話
があるようでしたから」

へ？

つまり、ワルドさんまだいるの？

「何でも、婚約について話があるって暇を貢つたらしげですけど」

あの人嫌いです、とシェスターは小さく呟いた。

シェスターが嫌うつてことはよつぱんじなんだろつな…一応警戒しどべか。

「仕事中に悪かつたな」

「いえいえ、私も少しすつきりしました」

じゃ、とシェスターと別れる。
しかし弱つたなあ。ルイズ嬢とはまだ話せないだろつし、サイトビ
うしょう？

「つづく人間は謎だな。欲しい物があれば力尽くで奪い取ればいいものを」

「力尽くで手に入れられないものだつてあるんだよ」

そう言つと竜帝は度し難い、と眉を顰めた。

「いつか理解出来るんじやないか？ 今のお前なら」

クオン大陸の大邪龍ではなくただの竜帝なら。
ただの竜帝つてなんかおかしいな。今度真名あるか聞いてみよつ。

「理解でやる由など来なくとも困ります」

「素直じゃないな！」

その言つて笑つたらぽかつと殴られた。
ホントに素直じゃない。

笑いをこらえながらテントへ戻ると、すゝく不機嫌な紅蓮さんと、
突つ伏してゐるサイトがいた。

…どういう状況？

取り合えず紅蓮さんの呪いを解いて話を聞く。

「何があった？」

「…ピンク髪の少女が来て、自分が結婚する事を伝えられたり、き
なり崩れ落ちただけです」
…とじめ刺されたか。

つて結婚！？

戦争終了と結婚式ー?（後書き）

まさかの結婚フラグが残っていた。

ここ の ルイズ達は アルビオン へ 行つて ません。 何故なら アルビオン の 勝利 は ほぼ 確実で、 わざわざ 手紙 を 取りに 行く 方 が 危険 な ので。 ですが サイト は ワールド に ぼこられた あと だつた り。

因みに、 こ の あと 紅蓮さんは 上司達 の テント 暮らし を 知り、 『 そ 然 と し ま す 』。

流石に 男 四人 で テント 暮らし は 如何な もの か と 考えた イオ が 予備 の テント を 出し たり も し ます。 でも 結局 テント 。

テント 暮らし しなんて し た こと ない だろ う 紅蓮さんは 大丈夫 だろ う か。

「ハムグコアン殿の轍跡（繪書也）

タイトルの通りです。

ラドグリアン湖の精靈

落ち着け俺。」「うう時は素数を数えるんだ……って現実逃避してる場合じゃねえええ！」

数日アルビオンにいってたら」「主人様が結婚。どうこう展開だホントに！」

「……先生、大丈夫ですか？」

「無理」

サイトじやないけど凹みたいよ……。

あれだ、妹が嫁に行く気分？ 笑えねえ。

シャルが嫁行くときもこんな感じなのかもな……。

認めるかああああーーー！

「……竜帝様、また洗脳か何かを？」

「しどりんぞ紅蓮の魔導師。あれは素だ」

外野が何か言つてるけどスルー！

未だ嘗てなく腸が煮えくり返る……！ ヒースが相手だひとつ認めないからなシャルー！

…つて落ち着け。今の問題はシャルじやなくてルイズ嬢だ。

まずは問題の把握だ。話はそれからだ。

「というわけで教えて『テルフ!』

「おう? 帰つてたのかエルフの兄ちゃん」

凹みまくってるサイトからデルフリンガーを拝借。
本人まだ凹んでるしぃよな。

「ああ、あの娘っ子の事かあ。意地だよ意地」

「意地い?」

「ん。婚約者にプロポーズされて、相棒が嫉妬してたのにも関わらず突っぱねちゃってなあ。

あの気の強さだろ? 謝れずにまた突っぱねてプロポーズを受けちまつたんだ」

「…成る程」

結婚つて人生の一大事だろ、そつ簡単に決めちゃつていいんかねえ?
しかし呆れた。

ルイズ嬢もだが、そこなへタレもビツして想い合つてることに気づかないかな。

「ん、ありがとウールフ。あとで磨いてやるよ」

「ありがてえ。相棒は手入れド下手ビンガか、やつてくれすらしね

えからな

「デルフを一寧に鞆へ戻して背負つ。サイト丸まつてゐるし。
さて、当面の問題はサイトか。

だつて人様の結婚式なんてそつ簡単にぶち壊せるもんじやないし。
いや、普通は壊さないもんだけど。

「何だ、壊さんのか」

「だから心読むなよ、つか残念そつとしてるんじやない」

「…あの、話が見えないんですけど」

あー、紅蓮さんは知らないもんな。

竜帝説明よろしく。俺はサイトにお説教していくから。
面倒な訳じやないぞ！

「む、待てイオ！」

「待たない！」

サイトの襟首掴んで適当にテレポート…

一瞬で景色が森から湖へ切り替わる…つておい！？
「適当にしておいたー？」

やつちまつたあああ…

浮遊術を使う前に湖に飛び込んで落ちる俺たち。

「な、なんだあ！？」

サイトも正氣に戻ったみたいだけじゃねえじゃねー！

俺泳げないんだよ！

情けないとか言つな！

ウーンデルは内陸、ミラー・ジュパレスは論外、ビートで練習しようと！

つか…やっぱ、『エルフ背負つてゐせいかもしれんが、だんだん沈んでく…。

「イオ、しつかつしろー。」

サイトの声が遠い。

苦しい…！

もつだめか…短い蘇りの日々だったな…。

『イオはんー。』

ぐいっと身体が引っ張られた。

不思議なことに先ほどまでの苦しさがない。

『じつかりしてえなー。』

「イオー！」

「…サイト？ それに、もう一人…」

『「うひゅうひゅー…』

ぱしゃん、と水が弾け、チカラが集まる。

チカラは青い泡をなし、小さな人魚の姿を作った。

「ウンディーネ…？」

「正解や！ 今はうちのチカラで一人を押しとるさかいな、陸まで
もつ少しやで！」

何で、どうして。

あまりに唐突な展開についていけない。

水の流れに乗せられて、無事に陸にたどり着くと、ウンディーネは
人好きのする笑顔で笑った。

「助かつてよかつたわ～」

「ありがとう、助かつたぜ。…でもお前何なんだ？」

「うひゅは水の精霊や！」

そう言ってウンディーネはふふん、と小さな胸を張った。

…あー、悪かった、悪かったからその二叉の槍引っ込めてください。

「でも何でウンディーネがここにいるんだ？ …まさか八精霊全員
いるんじや」

「うひにも判らん。気がついたらここいたんだよ。他のみんなの居場所もわからへんし……」

「…あー、知り合い?」

「「「うん」」

サイトの間に迷うことなく頷く。

「けど、なんでワグリアン湖のど真ん中に落ちてきたん?」

「あはは、適切なトレポートしたら失敗しちゃって……」

いやあ懐かしいこの感じ。つかここワグリアン湖つていつのか。…って和んでる場合じゃない! ルイズ嬢の結婚問題、どうしよう……。

表情に出てしまつたのだろう。ウンディーネが心配そつこのぞき込んできた。

「お困りかいな?」

「…まあ、困り事っちゃあ困り事なんだけど」

そうだ、ウンディーネに相談してみよう。

かくかくしかじかでこうこうことなんだけど……。

「…取り合えずそつちのあんさんがヘタレなのは理解したわ

「ぐふおー?」

ウンディーネの鋭い突つ込み！

サイトの急所にあたつた！ 効果は抜群だ！

…む、また電波が。

とにかく硝子のハートを再び粉碎されたサイトはうずくまつた。

「大体な、決闘に負けついでじけるつちゅうのがすでにあかん！

男だつたらもつとしゃつきりせんかい！ そこは済つてでも引き止めるところやろお！

女の子はな、纖細なんや！」

サラマンダーと一緒に戦争！」ついた彼女は纖細といえるのだろうか。

「イオはんす」ぐ失礼なこと考えてへん？」

「考えてへん考えてへん」

あ、移つちゃつた。

ともかく、ウンディーネの説教はまだまだ続いた。

…つか、途中からサラマンダーとの惣氣な件について。幸せそつだからいいけど。

サイトなんか魂抜けかけてるし。

まあ、慣れてなきや辛いよな。

説教は一時間に及び、サイトはすっかり屍と化していた。のろけ

「結論！ 好きな人へは？」

「本気で体当たつすること……です……」

「はいよろしい！」

説教は終了したようだ。

あんまり暇だったからデルフの手入れしてたよ。

「水に落としておいてよく濡れづけ」

「不可抗力だから許して？」

「いや、許さねー。きちんと鎧びとつまでしてもらわこやな？」

「いや、こいつ……！ 鎧びとつは大変なんだぞ！」

頭に来たので湿氣た鞘に押し込んでやる。流石に田向にはおことくが。

「へくしつ！」

寒っ！ 倉庫に入れてた服に着替えたはいいけど、頭が濡れっぱなしは寒すぎる。

サイトも同様みたいだ。…ちよつひとつつむんでんじょけいに寒そうだ。

「まあ、何はともあれありがとうなウンティーネ。これでやることは決まった」

「ええよ、つちも世みたいに話せて嬉しかったし。また遊びに来てや！」

うん、今度は紅蓮さんと一緒に来るよ。
あいつも何だかんだいってウン「トイ」ネには感謝していると思ひし。

…あれ、何か大事なことを忘れてるよ？

そんな疑問を抱きつつ、戻るためにテレビポートを発動した。

ラドグリアン湖の精霊（後書き）

ウンディーネ登場。 またすぐにでる予定。

浮遊術：

聖剣HOMの幻夢の主教が使つてるあれ。
どうでもいいんですけど、カリスマで飛行ユニットの上範囲攻撃持ち
つて一體…。

ロジー（弟兼主人公）は聖剣装備でも跳躍ユニットなのに。

本家の水の精霊様は基本は不干渉の模様なので出てきません。
ただ、ウンディーネが呼べば出てくるかも？

素人いん火竜山脈（前書き）

というわけで特訓編。
何でかというと本編参照。

とこうわけで戻ってきたよ！

しかしあつ少し遅く戻ればよかつた…とても眩しい笑顔があるんですが。

「よく帰ったなイオ。少し話さんか？ 殺し合いで」

訳…よくも面倒事を押しつけてくれたな。

あーあー、死ぬかも？

だが対策は練っている！

「竜帝、それより楽しいことしようぜ」

「ほつ？ 貴様をいたぶる意外に何があるのか？」

耳貸せ耳。

かくかくしかじかでこうこうことだけ…。

俺の提案を聞いて、竜帝は楽しそうに口元をつり上げた。

「成る程、貴様にしては面白い考え方だ」

「だらう？ ほら、紅蓮さんもおいでおいで

「…すつじく悪い笑みですよ先生」

紅蓮さんも人のこと言えない笑顔じゃないか。察しがよくて先生嬉

しきせ。

サイトが訃判らんつて顔してるけど、そんな顔できるのは今の「わ」だからな？

覚悟しろよ？

(悪寒がつ！？)

む、殺氣でも漏れたか？
いや、勘がいいのか。サイトがガタガタ震えてる。

「なあサイト」

「つ、何だよイオ？」

「お前ルイズ嬢に結婚して欲しくないんだよなあ？」

にんまり神父スマイルで笑うと、サイトは面白ごべりご慌てだした。

「違つ！？…………つー……あー……違わ、ない」

素直でよろしい。

ウンディーネに会えて本当によかつた。

「それに、ワルドに勝ちたい？」

「勝ちたい！」

今度はすごい勢いで頷いた。

そんなに悔しかつたのか。まあ都合がいいんだが。

「じゃあ特訓しようつか

「…え？」

*

暖かな地熱、広大な密林に、ざつしりとした存在感を出す山々。

火竜山脈へやつて参りました！

うん、辺りから色々とヤバそうな気配がするな！

「ちょっと待て！？ IJIRANGでいえば上級者がくるような所だ
ろ霧雨氣でき！」

「心配するな、別に戦えって訳じゃない。

生き残れ！」

「変わんねえ！」

変わるぞ？

今のサイトには基礎能力が足りていない。魔法衛士隊の隊長といつ
ワルドには全く歯が立たないだろう。

そこで、一歩間違えば危険しかないこの火竜山脈でサバイバル！
生きて帰れれば危険察知能力と身体能力が上がるぞ！

つまりせつときの提案は、サイトに手っ取り早く度胸をつけさせようつてことなのだ。

「… そういうやこって外国だよな？ 不法侵入：って今更か。
まあ、テレポートで真っ直ぐきたから不法侵入で捕まることはない
だろう。ここどう見ても人外魔境だし。

あ、今回はちゃんとルイズ嬢に言つてきたよ、一週間ほどサイト借りるつて。

その後爆破されかけたけど。

…想い合つてるよなああの反応は。

気合いを入れねば申し訳がない。一応代わり置いといたけど。

横っちょで竜帝が懐かしそうに田んぼを細めた。

「ドラゴンズホールを思い出すな

「そうですね…あ、ドラゴン飛んでますよ

「帰らせてくれ！？」

「バカたれ、帰つたら来た意味がないだろ。

えー、では今日から一週間、サイトいぢ…サイト強化週間にした
いと思います」

うつかり本音が。

サイトが思いつきり責ざめたけどまあスルー。

「サイトにこなーじで、一日素振り千回、食料調達などをしつつ、できればゴリゴリからも逃げきれる体力をつけて貰いたい」

「無茶言つなよ！ そんな短時間で体力が付く訳ないだろ？ わつと筋肉痛だつて酷いぞ」

「無理じゃないんだな。

ヒールライドで、筋肉痛にも効いたりするんだよね。限度はあるが。

それを教えるとサイトは小さく悲鳴を上げた。

「あ、命の保証はあるからな？ とにかく荒っぽくても基礎をつけないといけないからな」

サイトがこれからやることには体力と度胸が必要だからな。技術を教えるのはその後。教えるのは俺ではないけど。因みに俺は救護係。

紅蓮さんと竜帝にはサイトの命の保証はして貰つて、あとは好き勝手にしていいといつてある。

流石にHインシャントと神獣の技は自重して貰うべきだな！ あと、狩りすぎるなよと注意した。訓練所にさせて貰つわけだし、できるだけ命は奪わないようにしなこと。

救護係も楽じやない。

まだ震えているサイトを安心させようと、ぽんと肩を叩いた。

「大丈夫。ラスボスと中ボスが守つてるんだから死ぬわけがないよ」

「…ラスボス？」

「知りたそ娘娘だな？…訓練が終わつたら、ちょっと話すよ」

「…いや、サイト達にはあんまり過去のことを話してなかつたな。俺が覚えてないのもあるが。」

「…どうか考えていると、サイトの震えが止まつた。いや、堪えている？」

「…そのまますぐな瞳でサイトは俺を見た。」

「…死なんいんだよな？」

「俺の矜持にかけても絶対死なさないよ。死ぬほど怖い思いをするだけだ。」

「…話を聞く限りお前の状況は絶望的に悪いし、ルイズ嬢を諦められるなら戻るよ？」

「やる」

「…」

短くはつきり、サイトは頷いた。

その目にはつきりとやる気の炎が点つてゐる。

すっとテルフを差し出す。

「素振り千本、忘れるなよ？」

「へっ！　一日五千だって振つてやるぜー！」

上等！

さあて、サバイバル生活の始まりだ！

素人いの火竜山脈（後書き）

恐らくサイトを初心者の状態で火竜山脈に放り込んだのはイオぐらいでしょ。

まあ、パーティメンバーが中ボス×2とラスボスだし、これくらいやってもいいかなと！

：反省します。けど後悔は（ゝゝ

しかしテレポート万能説。

まあ地図を完全に把握している紅蓮さんがいなければ、前話のイオみたいな事になりかねるんですが。

テレポート（改）：

地理を把握してれば魔力の限りどこへもいける。

適当にしすぎると『いしのなかにいる』状態になるので注意が必要。

因みにサイトの代わりに、『コピーを作る魔法の応用をして』二サイズな分身を置いたきました。

コロボックルサイズですが危険が迫ると教えてくれるようになつてあります。

「コピー魔法はベルガーさん直伝。

おまけ

「…くすん、サイトのバカ、イオのおせつかい」

『なくないよるいづう』

「くすん。あんた、イオの作ったサイトの分身の割に馴れ馴れしいわね……」

『だつてるこゝの」とすきだからな～』

「なななにこつてんのよ分身のくせにー。」

『おつじなるもかーこつといがかわいことおもひてるぜー』

「……分身サイト、いつ来なさご。とと特別にベッドで寝かせて上げるわ」

『それもかーーー。』

成長記録（前書き）

まとめ的なもの。

決して修行風景が思いつかなかつたとかそういうのぢや（れ）

成長記録

一日目：

素振りをしたサイトが颯爽とへたばつていたので軽く回復してやった。

素振り程度で疲れてるんじゃない、と言つわけで紅蓮さんと食料を探しに行って貰つた。

すると直後に凄まじい火柱があがつた。

早くも後悔して現場の生き物達を治療した。九割方火傷だ。原因はファイアボールかな？

新たに火気厳禁と付け加えると、紅蓮さんはめちゃくちゃ不機嫌になつた。お前は放火魔か。

そう言つてやつたら、

「炎が使えずして何が紅蓮の魔導師ですか」

と言われた。

…つい納得してしまつた俺が恨めしい。

因みに、治療した生き物達は襲いかかつてきただけど丁寧にお帰り頂いた。

一番でかかつたドラゴンを、ベルティナモールでちょっと齧かしたら逃げられた。

サイトに本当に神官なのか疑われたけど…。

腹が立つたので実戦訓練をしてやつた。
つい熱が入りすぎてボツ「ボコにしたけど、まん丸ドロップあげた
から問題ないだろ?」

内容?

簡単な組み手だよ。ちょっと投げすぎたけど。

ちなみにその田は持っていた保存食でしのいだ。
倉庫の中身は腐らないが貯蔵が気になる。どれぐらいはいつたっ
け…。

明日から食料は俺が調達しよう。

二田田 :

早くもサイトが筋肉痛を訴えた。

軽く押さえる程度で回復してやつたが、予想外に早かつたな。

素振りをさせてから散歩へ行かせる。今度は竜帝が同伴だ。
渋ってたけど、ドラゴンが見えた瞬間にやつと笑っていた。サイト
ご愁傷様。

その間に俺は食料調達だ。メインは山菜。

幸い食えそなのは沢山生えていた。万一毒があつても、ティンク
ルレインで浄化できるから心配ないだろ?。

籠一杯に山菜を積むと、道中で火蜥蜴に遭遇した。けど教われはし
なかつた。

お腹空いてるのかとおもつて山菜を上げたら懷かれた。可愛い。キ
ュルケの気持ちが分かつた瞬間だつた。

火蜥蜴とは途中で分かれて昼食の準備をする。

倉庫に入ってる調理器具を総動員、…といつほどでもないが、鍋の準備だ。昼だけど。

ちゅうどいい具合にできた頃、散歩から帰ってきたサイトは魂が抜けたような顔をしていた。

ドラゴンが…と呻いてるところから察するに、巣にでも突っ込んだのだろうか。

鍋は上手かった。ちょっとピコッと来たけど、まさかな？

その後純人間の二人が腹をこわした。

すぐにティンクルレインで解毒したが、気をつけよう。

昼食後、少々の休憩の後でサイトをジャングルに放り込んだ。
勿論中空で様子見してるので死ぬことはないが、様々な生物から全速力で安全圏まで逃げるサイトを見て、ちょっと可哀想なことしたかな、と反省はした。

夕食は保存食使って美味しくしよう。

そういうや氣づいたんだけど、俺と竜帝は何故か襲われなくなつていた。

竜帝は本能で強大な存在だと見破られてるのだろうが、何で俺も？
サイトと紅蓮さんは容赦なく襲われてるんだけど。

無事に戻ったサイトには、じ褒美としてドロップあげといた。
流石に一発殴られた。

夕食は宣言通り保存食を使った。

干し肉と山菜のスープだが、スープは一人とも飲まなかつた。…これは安全なのに。

三日目：

恒例の素振り千本と回復から始まる。

しかし火竜山脈での生活が妙に楽しいのは何でだ？

日記を付けてると、紅蓮さんがむすっとした顔のまま稽古を申し出た。

火の魔法が使えないことがそんなに不満かよと突っ込んだら、違うと言われた。

まあ稽古は嫌いじゃないし、サイトは竜帝に任せて散歩に行かせて紅蓮さんと稽古だ。

因みに稽古といつてもほぼ模擬戦。

ただ、カウンタマジック使つたら盛大に怒られた。

手加減したらして怒る癖に、我が儘め。

取り合えず紅蓮さんをこいつてり絞つてサイト達の帰りを待つた。

そうしたら竜帝が何かの肉を持ち帰ってきた。

竜帝は上機嫌だったが…サイトはがたがた震えていた。何があったんだ。

竜帝と同伴をせるのははじめておいつ。

因みに何かの肉は味付けしつかりして炙つたら大変美味だった。

残りは保存容器に入れて倉庫に放り込んだ。サイトが食べれるようになつたら焼き肉でもしよう。

今日の昼は紅蓮さんと一緒に訓練させたいた。
具体的に言つと紅蓮さんが攻撃魔法（弱め）を使ってサイトがそれをよけるという内容。

被弾率が半端なかつた。紅蓮さんホーミングつけるとか鬼畜。

最初はホーミングすんなと注意したけど、聞かなかつたのでベルティナモールで沈めておいた。
年上の言つことはきこいつか！

紅蓮さんを沈めてしまつたので、代わりに筋トレさせたいた。腹筋背筋鍛えろよ。

そういうえばサイトに魔法教えるべきかな？

それ以前に使えるか判らんけど…帰つたらウンディーネに相談しう。

教えるにしてもある程度剣の腕を磨いてからだな。

成長記録（後書き）

セイントビーム：
光属性の攻撃魔法。ホーリーボールの上位。
全体攻撃にすると空から光の柱が降ってくる。普段は手から照射される細いビーム。

紅蓮さんが食らったのは柱の方。

こんな感じで修行風景をお送りしたいと思います。

成長記録？（前書き）

イオが料理で死の理由・シャルロットのため。

成長記録？

四日目：

今日もまた素振りから始まる。

ちょっと振りが早くなってきたかな？ 良い傾向だ。

回復して朝食。今日はご飯を炊いてみた。

サイトは何故か感動していた。米好きだったのか？

聞けば故郷の食物らしい。忘れてたけど異世界人だったな、今度から琴線に触れないよう気をつけよう。

今日は俺がサイトと散歩だ。

途中で仲良くなつた火蜥蜴に会つて、じゃれ合いついでにサイトの相手をして貰つた。

まああつと言う間に火傷だらけにされたけど。

傷を治して食べ物を探すと、火蜥蜴が果物の生る木を教えてくれた。ナバールで手に入るような南国フルーツがあつたので、今日の昼はデザート確定だ。

数個貰つて倉庫に放り込み、火蜥蜴とサイトと散歩を続けた。

すると途中、火蜥蜴の仲間に出会つた。

一匹一匹なら良かつたんだが十匹を越えたところで冷や汗を搔いた。

いやな予感がして全力でダッシュ。

一瞬反応が遅れたサイトが逃げ出した頃に、大量の炎が襲いかかっ

た！

当然全力で逃げる俺たちである。

「蒸し焼きか！ あ、昼何が良い！？」

「余裕あるな！？ 何でも良いよ！ スープ以外なら！」

余裕そうに見えるが実際かなりギリギリだった。

あと、走って判つたけど俺も体力落ちてた。特訓せねば。

炎に追いかかれ、迂回しながら何とかキャンプしている場所へ戻つてきた。

…あそこ、巣だつたんだな。

昼ご飯のデザートは旨かった。でも火蜥蜴に感謝したくない。ちなみに昼は宣言通り香草を使った肉の蒸し焼き作つてみた。サイトにはすげえ渋い顔されたけど、他一人には好評だった。

午後。

サイトの体力をしつかり回復させ、ジャングルに放り込む。前と同じだが、安全地帯に戻るまでの時間は確実に短くなっている。

末恐ろしい奴である。

どうも慣れたっぽいので明日は別の地域に放り込んでみよう。

晩飯は山菜の肉巻きご飯にしてみた。スープも作れれば良かつたんだが、嫌がるし。もう見分けはついてるつづー… 酷い奴らである。

五田田：

今日も素振りから始まる。ただしその回数は初日のはなくなりた。

多分二千回は振ってるんじゃないか？ 激まじい進歩だ。
ここ五日で俺たちはすっかり火竜山脈に慣れきり、今や友達すらできた。火蜥蜴とか、火竜の雛とか癒されいや火蜥蜴はちょっと苦手になつたけど。

最初はサバイバル生活についていけなかつたサイトだけど、今や肉を捌けるようになつてるし。

流石に生物は狩れてないが。狩らなくて良いけど。

そういや悲鳴も上げてないな。

ちょっとつまら…いや寂しいが、成長した証だ、祝つてやろう。

だがその前に恒例としてジャングルに放り込んでくる。今日また別ルートだ。

「と言うわけでドラゴンの巣の近くに来ていまーす」

「おこちゅうといやな予感しかしないんだが」

「大丈夫、逝つてこい！」

「いくの字ぢがあああつー？」

こんな感じで放り込んでみた。

…流石に今回は食われかけていたので、ベルティナモールでドライブン殴ったよ。

んでスリープフラワー使って眠らせて、ヒールライトで治しといた。暴れられると傷が増えるし…。

そういや、サイトが数瞬とはいえドライゴンを上回る速さで走ったのには驚いた。

やはり人間、危機意識によつて能力が呼び覚まされるものらしい。

氣絶したサイトを背負つて、ジヤングルを歩いて帰る。
途中で亜人みたいなのに襲われたけど、何だったんだろうあれ?
強くはなかつたけど。

帰るとお昼時はすっかり逃していたが、紅蓮さんと竜帝がちよこんと待つて吹いた。

心なしか早く作れ的オーラが出ていたので、スープと乾パンを出しておいた。

あー、紅蓮さん? 好き嫌いは許さないよ、ちよんとお話しよつか。

午後は竜帝に任せ、紅蓮さんへ説教タイム。

ちょっと遠くで絶叫が聞こえるけど気にはしない。

気がついたら夕方になっていた。

何か久しぶりに神官らしいこととした気がする。

晩御飯は紅蓮さんが文句が多かつたので作らせてみた。

味は…お察しください。

一応宮廷育ちの紅蓮さんに料理を期待した俺がバカだつた。

六日目：

腹痛が酷い。薬を飲んだのにまだ気持ち悪い。
今日は全然やる気が起きないので、基礎訓練させといた。腹筋背筋
鍛えろよー。

今日のご飯は保存食。味気ないが楽だ。

そうしたら竜帝が不満そうにビビッかいつた。…また何か狩つてくる
氣だな。

そして午後。

よしやく体調が回復したのでサイトと紅蓮さんと組み手する。

紅蓮さんはまあ、接近戦が弱すぎるのはわかつていたが…サイト強
くなつたなあ。いくら魔法強化なしとはいって、紅蓮さんを投げ飛ば
すとは。

とはいえる紅蓮さんは基礎ができるだけの素人なので、調子づかな
いうちにサイトを投げとこつ。

でも何があまりにも上達が早いし、これはひょっとするとサイトは
デュランと同系なのかもしけない。

ちょっと氣が早いけど、剣の稽古の計画を早めようかな？

夕方。

竜帝が帰ってきた、大量の山菜を浮かばせて。

… こんなにどうしようと。

ただ、人参とかもあったので、チキンライスを作つてみようと思つ。ケチャップ？ 自作だ！

夕食はチキンライスとサラダ、そしてスープ。意地でもスープは飲ませたい。

結果、今日は一人とも飲んでくれた。

よっしゃ！

余った山菜は少々を倉庫に放り込んで、あとは空からドリフトンの巣に放り込んでおいた。食べるかな？

成長記録？（後書き）

成長記録はあと一話続く予定。

そのあと、いろいろ急展開します。

前回の解説し損ね

ティンクル rein :

光属性の状態異常回復魔法。猛毒だらつと浄化するが腹痛には効果ない模様。

成長記録？（前書き）

サバイバル編終了。
基礎はついたと思います。

成長記録？

七日目：

今日は明日のために少しばかりの休憩だ。素振りはやじりせぬナビ。
休憩というわけで、今日はジャングルには放り込まれないけど頭を使つて貰うこととした。

一緒に食べられる草を探したり、テレポートで行つてる水場まで歩いたりなど、比較的平和な修行である。

しつかりと念を押して覚えろよ、と言つた時、サイトは悪寒がした
そうだ。

勘が良くなつたようで結構。

昼食を食べてからは復習がてら違うルートを巡つたりなどした。

サイトの不安そうな顔が愉快だったが、こんなことする理由は黙秘した。

明日のお楽しみだからな。

夕食はちょっと手を込めてみた。

流石に設備がないから豪華なのは無理だが、それでも寿司もどきとか作つてみた！

お酔は何故かフォルセナにあつたんだ。休みの度に何とか買いに行つたあの頃が懐かしい…。

サイトは感動して泣いてた。

紅蓮さんも竜帝も、心なしか味わつて食べていたな。お粗末様でした。

「なあ、今日せどりついとんなに優しいんだ?」

寝る直前、食後の勉強とばかりに薬草を見せていたらそんなことを聞かれた。

今日は休憩つて言わなかつたつけ?

「言われたけど…なーんか引っかかるんだよな」

…本当に、勘が良くなつたなあ。
何でもない、とだけ答えて寝るよう促した。サイトはまだ怪しがつてたけど、ソラソリスリープフロワーで寝かしてやつた。

八日目:

今日からサイトを完全放置してみる。
多分起きたらテントもないし誰もいないわでパーティクだらうから、
メッセージセンターとしてミニサイズな俺の「パー」を置いてきた。

「パーはいはー説明してくれるはずだ。

「おはよサブサイトー 今日から本格的サバイバル生活だ。

昨日までの七日間で基礎訓練はしたから、後七日は自分で生き延びろー。

尚、本体達は火竜山脈の主の所へ喧嘩売りに行っています。死にたくないなら近寄るなよ?」

「イオーーーー?」

とまあ、いりこう状況だらうから、最初だけ防音結界張つといった。
ちなみに「コペー」は話し相手以外何もできない仕様である。ヒントも
何もない、本当に雑談だけする仕様。

無駄に凝つたことは認める。

因みに本体の俺達は本当に火竜山脈の主に喧嘩売るつもり。いやや
るのは竜帝だけだけど！

今日の所は搜索。結果は見つからなかつた。

「コペー」の方も異常なし。ただ、笑いダケらしきものを食いかけたつ
ぽい。大丈夫だろ？

九日目：

火竜山脈の主はまだ見つからない。そもそもどんな奴なんだ？
でも竜帝は強いドラゴンの力を感じじるとは言つていたから、やつぱ
りドラゴンなのかね？

竜帝が負けるとは微塵も思つてないが、この世界のドラゴンの本氣
も気になる。

ちょっと紅蓮さんと語り合おひ。

サイトの方も異常なし。

しかし謎だ。何で「コペー」は本体と性格違つんだ？ 僕は常にげらげ
ら笑うような奴じゃないと思うんだが。

その事を紅蓮さんに言つたらそつくりだと言われた。

心外だ。

十四日目：

…えらく田付飛んだな。忘れてた訳じゃないぞ！

十日目に主を見つけたんだよ。

驚いたことにそいつは喋れる上、本性の竜帝とタメ張れるぐらいの
巨大なドラゴンだったんだ。

一言一言話して即戦闘。

二人の戦いはとにかく滅茶苦茶だった。

本性に戻れない竜帝は神獣の技とかすべて解禁、自重？何それおい
しいの状態だつたし、

ドラゴンは圧倒的な質量と、強力なブレスを持つて竜帝と対峙して
いた。

つまり自重なしの全力全壊勝負な訳で、周囲にいた俺達まで被害が
きた！

しかもあいつらドラゴンじゃん？

体力とか人間の比ぢやないし、それが三日三晩。場所を変えても変
えても襲いかかってくる神獣の攻撃とかトラウマもんだろあれ…。

そんなわけで、コピーからの報告と自分達の身の安全の確保、怪我した生き物たちの治療に追われてたら日記なんか書けなかつた。あ、怪我を治したら色々な奴らに懐かれたよ。いつかの火蜥蜴混じつててちょっと引きつったが。

紅蓮さんは何か羨ましそうに見てた。

しかし、いかに人間の姿をしていても竜帝は竜帝だつた。莫大な魔力と膂力で辛くも勝利をもぎ取り、何か主と友情築いてた。いやあの主さんよ、今度は本性で勝負しろとか勘弁してください。部下達顔面蒼白だから。俺たちもだけど！

そんなことをコピーに伝えたら、げらげら笑われた。決定、見つけ次第消そう。

しかし長い一週間だつた。

サイトの特訓だろ、紅蓮さんも特訓だろ、竜帝の暴走だろ……あれ最後悲しくなってきた。

火竜山脈で仲良くなつたみんなが癒しだよ……。

コピーの気配をたどつてサイトと合流した。

一週間振りにあつたサイトは随分ずたぼろだつたが、まあ健康そうだつた。

成果は出たみたいだな。

ルイズ嬢、この一週間でサイトはすっかり逞しくなつたよ！

ひょろひょろと生つちよろかつた体はすっかり引き締まり。確認がてら紅蓮さんが攻撃すればしつかり回避。

ジヤングルへ放り込んでドラゴンにも臆せず、挑発して逃げるぐらーには素早く余裕を持つようになつた。

と言つわけだ。

「おめでとう！ サイトは素人から見習いへとクラスチェンジした！」

「見習い…」んだけやつてもか…。つかよくも置いてつたな！？」

技術がないんだから当然だ。

放置に関しては…まあ、頑張つたな！

「…」

無言で殴られた。えーと…うん、ごめん。

「わやはは、本体ざまあー！」

無言で「ヒュー」を握り潰す。

ぐえつと言つた後に魔法解除したのでグロテスクな事にはなつてないよー。

それで基礎段階は終わつた。

ただ、学院に戻つてこれから技術を学べば、サイトはあつと言つ間に一流ぐらいにはなれるだるつ。

いや、教えるのがあの人だとするともつと上達するかも？

まあ頑張つたし、凹んでるサイトには学院へ戻つたらデザート作つてやろ!」
…マルターのおっさん許可降りるかなあ?

「よし、じゃあ帰るか!」

「うむ、なかなか楽しかったぞ」

そりゃ良かった。

ありがと、火竜山脈のみんな。
迷惑かけちゃつたけど、元氣でな!

心中でぺこりと礼をして、テレポートを発動。
だが俺は気づかなかつた。

テレポートする瞬間、三つの輝きが鞄の中へ潜り込んだ事へ。

また一波乱ありそつたが、この時の俺の頭にはマルターのおっさん
にどう頼むかしか入つてなかつた。

成長記録？（後書き）

まさかの火竜山脈の主との決闘。いや、原作でもいるか判らないのに出しちゃいました。お察しの通り火韻竜です。

竜帝は人間の姿こそしてるけど、力や能力は基本は竜のそれです。いつか火韻竜と本性ヒューロードラゴンな竜帝の戦いを載せてみたいです。

しかし最近のイオは暴走気味な気がする…。そういう、何気に容姿が不明ですね。いつか説明するかも。

冒険と一步前進？（前書き）

キュルケはお姉さんって感じがします。

冒険と一歩前進？

「学院だ… ジャングルもなければドリーハンの巣もない学院だ！」

トリスティン魔法学院よ、俺は帰ってきたぞーーー！」

おお、すげえテンションだなサイト。

まあ、一般人がサバイバルから帰ってきたときの当然の反応か。火竜山脈はマジで人外魔境だった。

しかし懐かしいな～。まだ一週間…いや、アルビオンから帰った後一日しかいなかつたから、ほぼ半月ぶりか。

懐かしくなるわけだ！

よし、早速ルイズ嬢に報告行って、その後マルトーのおっさんとこ行つて南国デザートでも…。

「つー？」

ちゅぼどおん！！！

思いを馳せていると、いきなり爆殺されかけた。
もしかしなくても彼女だろうな…かわさなきや死んでたぞマジで。

といつか何で俺だけ…。

「おかげりなさい。」主人様を除け者にした旅行は楽しかったかしら？」

黒い！ 黒いよルイズ嬢！

何でそんなに不機嫌なのさ！？

ルイズ嬢は鳶色の瞳をきつとつり上げた。

「ちびサイトが消えたのよ！ ビック隠したの？」

「え…それだけ？」

思わず声に出したら手前が爆発した。田がやる気だ！

「あの分身は元々、一週間で消えるよう設定しといたんですね！」

「じゃあもう一度出して…」

はい！？

そりゃあ出せないことはないけどもう臨時はいらんだから…ってああ、もしかして。

「氣に入ったの？」

「…べ、べべべ別に氣に入つた訳じゃないわよ！ あんな、五月蠅いのなんて、その…そう！」

勝手にいなくなつたんだから見つけて戻してやりますと思つただけよ！

！」

…若いつていいねえ。いや俺もまだ若いつもりだけど。

この酷くねじ曲がった愛情表現に、サイトなんかトマトだよトマト。

竜帝と紅蓮さんばかりだるそうだけビ。

そういうば…。

「ルイズ嬢、結婚式いつなのさ？ 一週間前にはこの時期は忙しいって言ってたのに」

俺の記憶が確かなら、結婚するとなると式典に相応の準備が必要なはず。

それも王族貴族なら、並々ならぬ時間が必要な上、当人も招待状を書いたりとかするんじゃないの？

俺の問いにルイズ嬢は憮然とした様子で答えた。

「今は姫様が興入れだから」

「ああ、アンリエッタ王女がゲルマニアに嫁ぐんだったか」

紅蓮さんそんなのいつ知ったんだ？ 一週間火竜山脈にいたくせに。

まあともかく納得は行つた。

王族が結婚するつて時に、一介の貴族が結婚なんて…なあ？ 貢ぎ物とかで忙しい時期だらう。

いくらルイズ嬢が公爵家の息女といつても、王女様に頭が上がるわけがないと。

良かつたなサイト、時間の猶予はあるみたいだぞ？

「一や二やすんな！」

照れるな照れるな。

ルイズ嬢によると姫様の結婚から最低でも一月は後らじいし、たつ
ぶり修行できるな、うん。

「つて、話を逸らそうとしたって無駄よ！ 早くちびサイトを出し
なさい！」

本当に気に入つたんだな…。本物サイトも気にしてあげてください。

「俺より分身の方がいいのかよ…」

あー、また落ち込んでるし。ここはサバイバルじゃ矯正されなかっ
たか…。

すつごい面倒くさいなあ。だれか救いの手を…

「ダーリン！ 帰つてきてたのねえ！」

救いの手は割とすぐに現れた。

キュルケとその使い魔のフレイムだ。

キュルケはサイトにその豊満な胸を押ししつけるように抱きついてい
る。くそ、羨ましい！

よく見ると後ろの方にタバサとシルフィードもいた。一人と一匹は
俺たちを確認するつかつかとやつてくる。
いや、つかつかというより…突進？

つて待つて…？

「 もちろん ！」

「 げほっ！？ ようシルフィ、 半円ぶり…」

シルフィの体当たりやべえ… 内蔵出るとこだった。
腹を押さえつつ何とか立ち上がる。

「 大丈夫かい？」

ひょっこり金髪を揺らしながら覗いてきたのはギーシュだ。彼の相
棒らしい巨大モグラもつぶらな瞳でこっちを見ている。

まんまるドロップを口に放り込み、会釈する。

「 平気平気。 シルフィも手加減してくれたみたいだし」

そう言ってシルフィの頭を優しく撫でる。鱗が気持ちいい。
シルフィも気持ちいいらしく、ベロベロと顔をなめてきた。あはは、
くすぐつてえ！

そんな使い魔を涼しげな青い瞳で見て、タバサが口を開く。

「 どこへ行つてたの？」

「 修行だよ」

「 火竜山脈へ？」

タバサの言葉に田を見開く。

どうしてそれを… ってルイズ嬢なりぽろつと言いかねんな、うん。

しかし何でタバサがそんなこと気にするんだ？

「…ガリアへの不法侵入で捕まえなきやいけない」

「え！」

「嘘。その反応からして眞実だと判断する」

「年上にそう言う『冗談はいかんよ？いや、不法侵入は悪い』と思つたけどさ。

「えー、本当に火竜山脈へ行つてきたの！？ イオとリュウティは規格外だからいいけど、ダーリンとそつちの貴方、よく無事だつたわねえ」

「あー、キュルケ。こっちの紅蓮さんも色々と規格外だから」

さらりと規格外扱いしないで…つていつてももう否定できないな。悲しくなってきた。

シャル…兄ちゃんはどうとう人外の仲間入りを自覚しました。

心なしか「昔から人外じゃないでちか」と聞こえた気がする。

「でも、そんなに強いなら安心して行けるわね」

ちょっと思考をどばしてたらなんか話が進んでいた。
えつと何々？ 宝探し？

「そうよ！ 折角ダーリン達と一緒に行こうと思つてたらいないん

ですものー！

でも帰ってきたんだからやっと一緒に行けるわね、ダーリンっ

「ちょっとショルプスター！ サイトは私の使い魔なんだからね！？」

あー、この言い合い久し振り。

しかし宝探しがあ…面白そуда。

でもこの世界じゃハーフエルフの俺は無理だろうなー…。

「俺も行きかっただなー…」

「え、一緒に行かないの？」

きょとん、とキルケが心底不思議そうな目を向けてきた。

へ？

「うつそ、イオ行かねえのか？」

サイトまで何言つてんの？

俺ハーフエルフだよ？ 学院ならともかく、外に行つたら大騒ぎじ
ゃん。

「そつか… そういうばハーフエルフだったね君は

「忘れてた」

ざつくづくー！

な、何気に一番酷いなタバサビギーシュ…。

「あなたはエルフらしくない」

「…それって褒められてんの?」

「訂正。あなたはとても人間らしい」

だから問題ない、と彼女は言った。
えつと…それはつまり。

「一緒にいいのか?」

「当然でしょ!」

あんたもリュウティもサイトと同じ私の使い魔なんだから。…な
のになんたとリュウティは私に内緒ですぐどっか行っちゃうし、…
サイトも連れてっちゃうし。

けど、…まだ数えるほどしか一緒に過ごしてないけど、あんた達
が優しいのは判ってるわよ

最後の方は声が小さくてよく聞き取れなかつたけど…やべ、嬉しい。
何か竜帝と紅蓮さんがにやにやしてるけど、気にならないぐらい嬉しい
しい。

「あたしが言うのも何だけど、イオとリュウティはルイズとダーリ
ンと変に距離を取りすぎよ!…

どうせ貴方達、お互いのことをあまり知らないんじゃないなくて?」

キュルケの指摘にぐうの音も出ない。

確かに俺達は異世界の者だから、といってあまりルイズ嬢達と関わ

つてなかつた氣がする。

火竜山脈でのサイトとの約束もあるし、この際だから話すべきか?

竜帝にそつと目を向ける。

竜帝は口元をつり上げ、微笑んだ。

「イオ、お前の好きにしろ。私は今機嫌がいいからな、許す」

ずっと黙っていた竜帝が言つた。紅蓮さんもじくつと頷いている。

「悩むなんて、先生らしくないですよ」

「うだな…。

悩むなんて、俺らしくない!

俺はサイトに向き直つた。

「宝探しの間に、話しじよ。その、お互いのことを今まで何したとか…とにかく色々…」

……うわああ、恥ずかしい! 何言つちやつてるんだ俺! ?

絶対耳の端まで顔真っ赤だ。「ううう…こい歳こいてほんとに何言つちやつてんの。

恐る恐るサイト達の方へ顔を向けると、若者達はにかつと笑ついた。…タバサは雰囲気だけだつたけど。

サイトが一番の良い笑顔で言つた。

冒険と一步前進？（後書き）

本編でも語られたようにイオと竜帝は使い魔としては異例なほど関わりが少ないです。

これを機にゼロ魔組ともっと仲良くさせたい。

因みに精神は肉体に引っ張られるという言葉の通り、イオの精神はどうやらかといふと子供寄りです。

本人は大人だと思ってますが、実際は見かけの年齢より少し上程度の精神年齢です。

でも中身の年齢相応の面もあるよう…とにかく子供っぽい大人なんですね。

私は何がいいたいんだろう？

前途多難な出発（前書き）

ギター先生がよくわからなくなつてきました。

前途多難な出発

「おこーちゃんは、こいつもあんこでち

大粒の涙をこぼしながら、シャルロッテはいった。

「いつもいつもシャルを除け者にして、拳銃の果てには殺し合ひなんて、ほんと最低でち」

「あはは、それは否定できないな

何事もなかつたかのように笑つてみせると、シャルロッテはべらつと俺の頬を殴つた。

ポロポロと涙が頬を濡らす。

……悪かつたつて。だから泣かないでくれ、兄ちゃんまで泣きたくな
るじやないか。

「勝手に泣けばいいんだから……ひっく、うそえ……」

「シャルロッテ……」

隣に腰掛けたテコランがそつとシャルロッテの頭を撫でた。
ホークアイも辛そうに俺を見ている。

「おここら、野郎が情けない顔してゐるじやない。おまえ等にせ
れからも妹を守つて貰わんと」

「……殺して掛かってきたのによへりつば」

だって俺ぐらいを倒せなきゃ、この先の紅蓮さんや竜帝には絶対適
いつこないからな。

あー、紅蓮さんは別かな。ホーグアイはカウンタマジック出来る
っぽいし、何とかなるか。

竜帝は…ここに二人なら何とかしそうな、そんな予感がする。

つと、そんなことを考えてる間に力抜けてきた…もう時間がないな。

「シャル」

「ひっく…なんつ…でちか…」

泣いてるシャルの頬に手を当てる、笑みを作る。
こんな泣き虫、ほつとくのは心配だけど…ま、頼りにしてるからな
男一人。

「ずっと大好きだからな」

それきり、力が抜けていく。

よく見ると体が塵になってるみたいだ。…アンデッドの末路か。

最期に言いたいことが言えて、良かつた。

*

：懐かしい夢を見た。

いや、今見ると懐かしいこと叫つより恥ずかしいな。

何で今更…昨日あんな恥ずかしいこと言つたからか？

習慣通りに夜明けに起き、お祈りを済ませる。

今日から探しだ。

昨日のあの恥ずかしい発言の後、紅蓮さんの紹介を済ませてキュルケ達どびく行くのか決めといた。

と言つても俺は半分上の空だつたから覚えてないが…割と遠出だつたと思つ。テレポートあるから問題ないけど。

ちなみに俺はフードを絶対に外さないことを念入りに言われた。まあ当然か。

そう言えばシエスタも行くことになつたよ。

いや、俺じゃなくてサイトが声掛けた。その後ライズ嬢にお仕置きされてたけど。

通りがかつたロングビルさんがすつこ引いたけど、まあ一種の愛情表現だし！

「…ねはよー、イオはやつぱ起せるの早いな

「あ、珍しく早いなサイト」

まだ竜帝も紅蓮さんも起きてないの。」
それを呟つとサイトは遠い田をして、「ジャングルの生活に慣れちまつて……」と呟いた。

まあ、ジャングルでおおむち爆睡してられないしな。修行の成果が出て向より。

「じゃあ素振りしちけよー」

「言われなくとも判つてるって」

やつぱりサイトはデルフを持ち、素振りを始める。

さて、その間に暇だし、久しぶりにアイテム整理でもするか。

倉庫から適当にウイスプの像やら大地のコインやらを取り出す。
……？

「…何で減ってるの？」

超買い溜めしておいた精靈の像が綺麗さっぱり消え失せている。
泥棒な訳ないし、使ってないし……え、ほとんどじゆことこれ。

考えたくないが、異世界にくる途中で倉庫から一部が弾き出された
んじや……。

……ぐつばい、俺の数万ルク分の像。

「じへじへじへ…」

「ちゅ、どうしたんだ？」

何でもないさ…研究に使おうと思つてたのに。
悔やんでも仕方ない、魔法の種あつたし、地道に狙おひ。完全に運
げだけど。

そんなことを考へてゐると、朝食の時間になつた。

学院の「」飯も久しぶりだなと思つてたら、ギター先生にぼつたり出
会つて何か同伴することになつた。

因みにコルベール先生の隣もある。

「やあやあ、久しぶりですねイオ君にリュウティイ殿」

「あの、これは一体…」

俺の問ひにコルベール先生はこいつと笑つと、ちよいちよいとギ
ター先生を指差した。

「ミスター・ギターの計らいでね。ここ最近困なかつただらう。心
配して下さつていたんだよ」

「えー？」

「マジか！？」

え、でも俺達そんなにギター先生と親しい訳じゃないのになんで…？

竜帝も同じよひで、驚いた表情でギター先生を見つめている。

「違いますぞミスター・コルベール！ 私はそのですね、その奴らがあまりに顔を見せないので食事ぐらい恵んでやるつかと思つただけで」

ギター先生は何かぶつぶつ言つてたけど、俺たち全員ぽかんとしてしまつた。

「…良い人だ」

「うむ、善玉だ」

「うわー意外…」

だつてそれだけなら竜帝にだけ席あげればいいのに、俺とサイトと紅蓮さんにまで用意してんなんて…。

この世界の人間をちょっとナメてた。反省します！

「何を勘違いしている…？」

俺たちの生温い視線に顔を真っ赤にしたギター先生は、生徒達の視線に気づいて、ごほんと咳払いして乱暴に着席した。
久しぶりの食堂の「」飯は相変わらずこつてりしていたけど、非常に美味しかった。

だけど前々から思つてたんだけど…わざやかな糧じやないだろこれ。

朝食を終えて、俺達は裏手の森に集合していた。
タバサのシルフィードで冒険に行くらしいからな。

…どーでもいいんだが、倉庫のことを喋ると何でみんなして俺に荷

物渡すかな？

判つてゐるけどさー。

ポイポイと倉庫に荷物を放り込んでやると、慣れてるルイズ嬢とサ
イト達以外は呆然とした表情をした。

懐かしいなこの反応…。

む、いち早く正気に戻つたのはタバサみたいだ。

「それも、魔法？」

「そうだな、マジックアイテムみたいな魔法だ」

「教えて」

…流石にそれは予想できなかつた。

んー、この世界の人間でも俺たちの魔法が使えるか試してみたいし、
いいかな？

「じゃあ、旅の途中にでも試してみる？」「

こくり、とタバサは頷いた。

何か小動物みたいな仕草だなあ、シャルを思い出すよ。

「それ、便利そうね。あたしも教えて貰つて宜しいかしら？」「

「イオ、私を差し置いてツェルプストーになんか教えたらいどうなる
か判つてゐんでしょうね？」

… もう一回出発しようか。

でも流石に九人はシルフィに乗れないよな？
そこんとこどうだらうタバサ。

「荷物がないなら、多分大丈夫」

「きゅー！？」

無理そーだなあシルフィ。

… あ、良いこと思いついた！

考え込むふりをして小声で呪文を詠唱する。

「む、この魔力は… おいイオ！？」

「悪いな竜帝、ボディイチエンジー！」

「ちょ、その呪文ー？」

「 「？」」

竜帝と紅蓮さんが焦る中、呪文は完全に発動した。
ぼむつーとサイト、ギーシュ、竜帝、紅蓮さんが煙に包まれる。

「ちょー！？ 何してるのよイオー！」

「まあまあ見てなつて」

煙を追い払うと、そこには極小化した四人が呆然と突っ立っていた。

……いや、若干一名怒りでブルブル震えてるけど。

「……い、いきなりボディチョンジの魔法を使つ人がいますか！」

「だつてシルフィに九人も乗せるなんて無理だらう」

小さくなれば問題ないよな！

紅蓮さんにぐつと親指を立てると、頭を押され込んでしまった。

次の瞬間。

ぼむっ！といつ音とともに俺の体が煙に包まれた！
げほっ！？ ちよ、もしかしなくてもこれ！

「そうだ、ボディチョンジだ」

ひどく低い声と共に、田の前に、同サイズの竜帝の顔が。

「生憎と解呪はできんが、同じ田に遭わせることはできるや

「あ、ははー」

やべ、悪寒が止まらない。つか解呪できないとか絶対嘘だ。

……冒険行く前に俺死んだな。

ひんやりとした冷気が体を包み、それが「ホールドブレイズだとわかつた瞬間意識が暗転した。

ちびっ子の上に雪だるまが畜生！

前途多難な出発（後書き）

ボディチェンジ：

月属性の魔法でその名の通り変化の魔法。

これ使えば人間になれるんじゃねーの？とは思つてもゲーム仕様なのでちびっ子（もしくはモーグリ等）にしかなれません。いやイオなら改造してきそうなんですがね。

因みに何で竜帝が使えるかといつと、月の神獣の力といつとで。

竜帝はその気になつたら元に戻れるけど、あえて戻らないだけです。
サイトとギーシュはポカーン。

紅蓮さんは…まあ紅蓮さんですし。

ラスボスにボディチェンジが通じるのはひとえにイオが中ボスだからだと言つこにしておいてください。

まつたじ宝探し（前書き）

ぐだつてゐる。しかしさスボスは自重しない。

まつたり宝探し

出発してから数日後。

俺達は廃村にいた。

かつて村人がそれなりにいだらうその廃村は、所々の家は壊れ、草は生え放題等嘗ての面影を微塵もなくしていた。

何よりも廃村と言いたらしめるのは、そこに異形の魔物が徘徊していることだらう。

「…醜いな」

オーク鬼だっけ？ 俺もそう思つ。

空から悠々と廃村の様子眺めながら、竜帝に同意する。
俺と竜帝はそう、空から様子を見ていた。

基本戦うのはキルケ達だからな。一回戦つたらついやりすぎちゃつて怒られたんだよ！

因みに悪いのは竜帝だ。

よりによって木の神獣の技キルスティングガー使つたんだからな！

あれは迫り来る敵より茨をよける方が大変だつた。

そのせいで俺は竜帝のブレーキ役兼回復役である。怪我人でないけどな、良いことだ。

しかしながらどうして、全員結構な実力者だ。

キュルケは炎の使い手らしく、ここぞという火力があるし、ギーシュは意外に作戦担当など頭脳戦に強い。

タバサなんか戦闘と頭脳戦どちらも対応できるし、ルイズ嬢も二人に操作されて爆発の威力を生かしてる。

サイトも言わずもがな。火竜山脈で鍛えた体は無駄じやなかつた。

そういうやルーンの効果、封印しつぱなしだけどいいのかな？

因みに紅蓮さんは自発的にシェスタのお手伝いに行っている。珍しいこともあるもんだ。

…え、出発の後どうなつたかつて？

一言で言えば地獄。

他の連中はシェスタの鞄に入つてたのに、俺だけ空中遊泳だからな！

竜帝が魔力で無駄に強化した紐を俺にくくりつけ、ちびサイズのまま鞄の中から吊すつてやつ。

本気で死ぬかと思ったよ！

「沈黙」させられて飛行術使えないし悲鳴も上げれないし、哀れんだルイズ嬢が助けてくれようとしたけど地味に結界張られてたし！

生きててよかつた！！

「む、動くみたいだぞ」

竜帝がそう言って指差した遙か下では、青い髪の少女が杖を振るつていた。

氷の槍がオーク鬼の足を止めるように襲いかかってる。

「成る程、確かに一人じゃ分が悪いな」

タバサは一人、対してオーク鬼は数体。 賢明な判断だ。

足を打ち抜かれたらしいオーク鬼達は、この上空までも聞こえる叫びを上げ、一気に炎に包まれた！

キュルケの魔法だな。

「いや、あの土小僧の魔法もある。恐らく油でもぶっかけたのだろう」

「あ、成る程」

通りで燃え盛るのが早いわけだ。

しかしオーク鬼達はしぶとい。 炎に包まれながらも最期の悪足掻きにタバサへ拳を向けている。

だが、タバサは慌てることなく佇んでいた。

何故なら、突如現れた青銅の人形が横槍からオーク鬼達を吹き飛ばしたからだ。

ギーシュのワルキューだな。

しかもオーク鬼達が吹っ飛んだ方向には、ギーシュの使い魔、ヴェルダンデが掘つた落とし穴があつたらしく、オーク鬼達は数体落つちた。

しかし数体はしつこく生き残つてゐる。本当にしつこいなー。
その後。

轟音と共に爆発で一体の頭が吹き飛んだ！

「つか、何でこの上空まで聞こえるのヤー！」

「単に我らの耳が他より良いだけだろ！」

そつこいつ竜帝も耳を押されて顔をしかめている。
あー…俺より耳良いんだな。

かく言つ俺も耳を押されてはいないが顔しかめてるだろ！

お、そんなことしてゐ間に残り四体に。
いつの間にやら飛び出したサイトとキョルケの使い魔フレイムが、
残つたオーク鬼を打ち倒す！

ふむ、やっぱ剣術は必要だな。今のサイトはテルフのサポートで剣
振つてるだけだし。

早めにあのマジックアイテムを手に入れなきゃなあ。

「お疲れさん！」

オーク鬼退治が終わったので、地上に降りる。
廃屋の陰から出てきたキュルケ達も揃つて、食料調達組以外は全員
集合したな。

「じゃあ、早速お宝を探しましようか！」

自信満々にキュルケが言う。

「けどキュルケ、そつ言つてお宝がないことは何回目だい？」

呆れたようにギーシュがいづ。

キュルケはむつとした表情でギーシュに詰め寄つた。

「中には本物もあるかもしれないじゃない！」

「けど、廃村や洞窟に潜つては化け物との戦いばかりじゃないか！
割に合わないよ」

あー…。確かに今までの地図はスカだったしな。

どうみてもガラクタな元剣みたいな錆びた棒切れとか、鏽つぽい鉄塊とか。

しかも行く所々に魔物がいるし、確かに割に合わないだろ。

「まあまあ、次こそ当たるかも知れないだろ？」

「お宝の地図なんて今も昔もそんなもんだろー」

デルフの汚れを払いながらサイトとデルフが言う。お前ら能天氣だ

なあ……。

「とにかく！」の村の廃寺院に行くわよ！　「」にはブリージンガメルつていう黄金の首飾りがあるんだから…」

「また偽物なんじゃないの？」

「い、い、か、ら、行くわよ！」

渋るメイジ組を引き連れてキュルケは意氣揚々と歩いていった。轟沈しなきやいいけど。

くいくい。

む、袖を引っ張るのは誰だ？

下を見るとタバサが相変わらずの無表情で袖を引っ張っていた。

「…」の前の続き

「タバサは行かないのか？」

「」もハズレ

ズバッと言い切るタバサは容赦がない。譲る気はないらしい。んじや、今日も倉庫を試しますか！

そう言つと、タバサは首を横に振つた。

「今日は別の」

「別のと言われても……倉庫もつ開けるのか？」

尋ねると、タバサは何もない空間に手を突っ込み、棒きれを取り出した。

…マジか。

「マジックアイテムを使つ感覺で出来た。これは魔法といつよりアイテムに近い」

まさかマスターするとは。

紅蓮さんでさえ一週間はかかったのに…

タバサは天才なのかも知れない。簡単な理論と術式を教えただけであつたりできるとは…。

相変わらず無表情だが、どこか得意げに見える。

「次」

「判つたよ。でも精靈魔法は適正がないと難しいしな…」

「それは、エルフの先住魔法とどう違うの？」

「…んーとね」

困った。

先住魔法ってよく知らないんだよな…どうしたもんか。

その時。

「また外れたーー！」

予想通り、ハズレに打ちのめされるキュルケの叫びが聞こえた。何というか…。

「元気だよなあ君の親友」

「…否定はしない」

後でいい?と聞くと、タバサは渋々ながら頷いてくれた。
しかし実を言うと助かつた。

こっちの先住魔法って詳しくないんだよな…。
系統魔法が理をねじ曲げて現象を起こすなら、先住魔法は理に沿つて現象を起こす、ぐらいしか知らないし。

つまり、何かするのに複雑な工程がいるのが系統魔法で、一本道なのが先住魔法らしい。

しかしこれだけ聞くと、先住魔法って俺達の魔法に似てるなあ。
案外、先住魔法っていうのは俗称で正式名称は精靈魔法だつたりして。

その夜。

俺達は廃墟となつた寺院でシエスタ作のシチューを囲つて食べていた。
しかしシエスタ料理上手いなー。美味しい。

「これはなんていうシチューなの？ ハーブの使い方が独特ね。あと、なんだか見たこともない野菜がたくさんはいってるわ」

「私の村に伝わるシチューで、田シユナヴンって言つたんです

「えヨシユナヴン…何か引っ掛かるなあ。

昔どこかで聞いたような…ビトノグレカシイ味がするし。

サイトも首を傾げてこる。

シエスタはここぞとばかりにサイトニアプローチを始め、田聰く見つめたルイズ嬢がシエスタを牽制するのは放つといいで。いや、冒険中毎日そうだし。

食事の後、キュルケは地図を広げた。
しかしいつもはずれが続くとは…。

「キュルケ、そろそろ学院に帰った方が良いんじゃないかな？」

「イオの言つとおつだ、時間の無駄だよ」

俺そこまで言つてないからなギーシュ？

「後一件だけ…」それで最後にするわ

そういうてキュルケは焦つたように地図を掴み取る。

「これ…」じこへ行つたら学院に帰るわ、それでいいでしょ？

「何とこうお宝だね？」

「リューニーのはじめもつて書いてあるな」

地図を覗き込んで紅蓮さんが言った。

その後、ルイズ嬢とサイトの取り合いをしていたシェスタがずつこけた。

「うわっ、シェスター！」

「あ、ありがとうございますサイトさん…。あの、ミス・シェルプ

ストー、今『竜の羽衣』って…」

「あら、あなた知ってるの？ タルブの村の近くなんだけど

シェスターは一度息を大きく吐くと、まっさりと言った。

「わたしの故郷です」

まつたり宝探し（後書き）

キルステインガー：

木の神獣ミスボルムの必殺技。無数の巨大な茨が襲いかかる。茨自体に凶悪な毒が含まれているので危険。

ミスボルムといえばカボチャ。どうでもいいけどパンプキンボム投げつけるのやめてください。orz

異世界の宝（前書き）

ようやくここまできた。
本人も忘れがちですがイオも転生者。

翌朝。俺達はシルフィに乗つてシエスタの故郷へ向かつていた。といつても俺と紅蓮さんと竜帝は相変わらずちびっ子だ。

テレポートで行つても良かつたけど…タルブの村の正確な位置なんて知らんし無理。ラ・ロショールの向こうの草原の村だけじやちょっと。

そもそも俺等ラ・ロショールが判らんし。

今回はちゃんと許可取つてるよー。初日の失敗は繰り返したくないからな！

…正直竜帝が本来の姿ならみんな余裕で乗れるのに。

「言つておくれが、私は背に人間などを乗せる気は全くないぞ

「判つてるよ！ とこかまた心読むな！」

「でも、何で戻れないんでしょう？」

それが謎なんだよ紅蓮さん。

そんな事を喋つていると、頭上、つまりシエスタ達は『竜の羽衣』の話を始めていた。

「どうして『竜の羽衣』って呼ばれているの？」

「それを纏つた者は空を飛べるやつです

言いにくそうにシェスターは答えた。

風系のマジックアイテムかなんかかと思つたけど違うのか？

「でも、そんな大した物じゃありません。インチキなんです」

「どうして?」

「持ち主は私のひいおじいちゃんだったんですが…ひいおじいちゃん、それで東から飛んできたって言つてたけどみんな信じてなくて」

私も信じてません、ヒシエスタは続けた。

「本当ならす」「こじじゃないの」

「でも、誰も飛んでるといふを見たことがないんです。誰かが『竜の羽衣』で飛んで見ゆつて言つたときもひいおじいちゃん飛べなくて」

「成る程、それで名ばかりの秘宝か」

納得。

でもそれは本当に名ばかりのかな? 固定化の魔法まで掛けて貰つて、寺院まで建てるほどだ。

何かあるに違いない。

…上でキュルケ達がインチキなら売り飛ばせば良いとか言つてるけど、無視だ無視。

*

俺とサイトは目を丸くしていた。

俺たちがいるここは、タルブの村の寺院。『龍の羽衣』を包むよう
に草原の一角に建てられたそこは、今までに見たどんな寺院とも異
なる風貌をしていた。

丸木を組み合わせた門に、石の代わりに板と漆喰で作られた壁。木
の柱。白い紙と、縄で作られた紐飾り。

懐かしい。

「…」こんなのは初めて見るはずなのに。

板敷きの床の上に鎮座しているくすんだ縁の『飛行機』もまた、何
となく懐かしさを漂わせている。

…もしかしたら、転生前の記憶の残滓かもしれない。
もつまどんと覚えてないけど…本当に懐かしい。

サイトも何か感銘を受けたようで、じつと『龍の羽衣』を見つめて
いる。

メイジ組は珍しいものを見る目で見てるけど、欠伸をしたり、疑念
の視線からこれの価値に気づいてないな。

「これは…小型の飛行空母ですか？ でも小さすぎるし…」

「否、どう見ても一人乗りが前提とされている。旗となるべき空母
でなく…さしつけ自由に動く戦闘のための飛行機械」

流石竜帝、一目でそこまで見抜くとは。

「これは状態もいいし、燃料があれば飛ぶな。

まさか異世界でこんな進んだ飛行機を見れるとは思わなんだ。

「こんなものが飛ぶ訳ないだろ？ 翼は固定されてるし、羽ばたけないじゃないか」

「私もギーシュに賛成。正直、飛べるなんて思えないわ」

「飛べるよ」

はつきりとサイトが声を出した。
あんまりこもはつきり言つもんだから、みんな驚いたように視線を
サイトに向ける。

「なあ、シエスタ。その髪と皿の色、ひこおじこちゃん似だつて言
われるだろ？」

「えつ、どうして判つたんですか？」

サイトはやつぱつ、と飛行機に皿を向けると皿にひこおじこちゃん
の形見はあるかと尋ねた。
あれ、もしかして…。

「回じ世界の出身？」

「…の可能性が高いな

どつやうお暮を見させてくれるやつ。

竜帝と顔を見合させ、俺達はサイト達の後へついて行つた。

シエスタのひいおじいちゃんのお墓は村の共同墓地の一画にあった。他の白い石墓とは明らかに作りが違う黒い石のお墓だ。

「ひいおじいちゃんが、亡くなる前に自分で作ったんですって。異国の文字みたいで誰も読めないんですけど」

「海軍少尉佐々木武雄、異界二眠ル」

すいすいらとサイトが口にしたのは、この文字の読みだり。シエスタは驚いたようにサイトを見つめている。

…ナビこれで確定した。シエスタのひいおじいちゃんはサイトと同じ世界の出身だ。

東から飛んできたって言つてたな…東にサイトと故郷を結ぶ手がありがあるかもしない。

最近忘れてたけど、サイトは異世界出身だ。家族も心配してるだろうし、早めに手がかりを見つけてあげないと。

シエスタの厚意で俺達はシエスタの家に一泊した。幸いにも俺がハーフエルフだということはなんとかばれなかつた。シエスタの弟にフード引っ張られたけど。

それで、何もしないのも悪いからということで紅蓮さんをひとつかまえて医者をすることにしました。

「先生……問答無用で」を使わないで下せ……」

「昔を思い出すだろ?」

「あまり思い出したくないです」

そう言いつつしっかり薬草を擦り潰しててる紅蓮さんは律儀だと思う。何だから阿尔テナには長くいたからな。その頃魔法が使えないってへばかつた紅蓮さんをアンジエラ王女と『特別授業』に放り込んだのは良い思い出。

ホセじいさんも賛成してたし問題はなかつたよ?

……と話がされた。

「本当にありがとうございます。村のみんなを無料で診察してくださいなんて……」

「いえいえ、一宿一飯の恩返しですよ」

そう言つて村長さんに腰痛に効く薬を渡す。

あ、そりそり! 僕が医者やつてることで病人の治療したらブドウの酒貰つたよ!

え、聖職者が酒飲んでいいのかつて……気にすんな! 汝飲むことはあつても飲まれることなかれ、だ。

まあ治療の他に汚物処理をした方がいいとか、この薬草は乾燥させてお茶にすると飲みやすいとか教えたりしたけど。

あ、余談だけど治療中のタバサの顔が怖かった。

なんか、獲物を見る目で見られてた氣がするんだけど氣のせい?

「それはともかく、帰つたらブドウ酒で竜帝と紅蓮さんと一緒に一杯やる予定。楽しみだ！」

因みに、流石にブドウ酒を大量に貰いすぎたので俺達は一足早くテレポートで学院に帰ることにした。

サイト達は『竜の羽衣』を持ち帰るから竜籠を待つんだって。

竜籠というのは、竜を使った宅配みたいな物らしい。
見てみたい気もするけど、竜を使うのは兵士だって話だしややこしそうだからせりふだと帰るに限る。

最初は俺達が頼まれたんだけど、さすがに俺達のテレポートでもあるんな巨大な物は転移できなし。
どうでもいいけど金ひとつある気だら? 貴族だしひとつでもなるんかな。

「じゃあ、先に帰つてるぜー！」

「おー、また後でー！」

サイト達とひとまずの別れをした後、テレポートで学院に帰る。
瞬き一回の間で広い草原から見慣れた森へ。

タルブの村のブドウ酒をたっぷりと堪能しながらサイト達を待つこと数時間。

その間にギター先生とミス・ロングビルと何故か学院長が現れ、ち

よつとした飲み会を楽しんでしまつた。

数時間後、案の定、サイト達は運賃を払えず困つていたらしい。
それをコルベール先生が立て替えてくれたとかなんとか。

らしい、といひのは飲んでた全員が落ちけやつたからだ。

…つーか、途中で記憶がないんだが何が起きたんだろう?.. みんな
顔真っ赤で服が乱れ氣味な上、竜帝まで眠つてるし。

学院長が来たときに場所変えて客室で飲んでて本当によかつた。

しかしおかしいな、せめてサイト達が来るまでは酔わないようこ時
々パイプイ草の薬含んでたんだが…。

本当に何が起きたんだろう?

異世界の宝（後書き）

パイパイ草：

状態異常回復アイテム。作者の個人的主観では苦そう。

飲み会の時に何が起こったのかは、想像にお任せします。

タバサの秘密（前書き）

タバサメインの話です。

：あれ、ルイズどこいった（爆）

タバサの秘密

宝探しから帰つてきて一週間経つた。

『竜の羽衣』…もとい、正式名零戦はヴェストリの広場に鎮座した。まだが、サイトの話によるともうすぐ飛びらしい。何でもコルベール先生が燃料造りをしてくれているのだとか。

コルベール先生に感謝。また後で差し入れを持つて行こう。

ここ一週間、特に変わったことはなく、極めて平和な日々だった。
…俺の頭一つ分したで袖を引っ張つて、青い女の子を除けばな。

「…タバサ。一週間も張り付いてるけど何か用？」

「観察してる」

一週間ずっとこの調子だ。

別に邪険にしてるわけじゃないが、どうにも調子が狂つ。

それに、学院にきて最初の頃、それはもう熱心に追いかけられたせいで微妙に顔が引きつてしまつ。つといけない、話がずれた。

「前もそつたけど、何で俺に付き纏うんだ？ 薬がほしいのか？」

「…」

俺の問いにタバサは答えない。

氷みたいな青い瞳をちらちらと向けながら、何かを考えてるようだつた。

うーん…。

「言こいくつ？」

尋ねると今度はこくり、と頷いた。

どうするかな…今は竜帝と紅蓮さんアルビオンだし、サイトもコルベール先生のことだ。

こいつに限つて相談できる人がいないとか！

キュルケなら難なく聞き出しちゃうんだらうが、生憎俺にそんな苦当はできないし。

「せめて、病状を教えてくれないか？」

取りあえず家族の病気を尋ねることにする。

後回しとも言つー…

タバサはかなり長い沈黙の後、真っ直ぐ俺の目を見た。

「心の病」

「…ふむ？」

これはまた、かなり難易度の高い病状である。

ただ、タバサが薬を欲していることはストレスからくるものじ

やないな？

恐らく呪いや毒に関する部類だろ？ そうでなければ薬なんぞ根本的な解決にならんし。

「一応確認するけど、ストレスが何かで心の病にかかった訳じゃないのか？」

「違う。母様は毒で心を狂わされた」

毒で、か。

何かいやな予感がするんだが、実際の症状を診ないとどうじょうもないなあ…。

この青い少女は今にも泣きそうな顔をしてるし、ビリにかしてあげたいって気持ちも勿論ある。

「判った、診てみるよ。

けど、実際に会わないといけないからお母さんにお会わせて欲しいんだけど…」

そう問うと、タバサはずいぶん迷つてるようだった。
え、これも黙りっぽい？

かなり長い沈黙の後、タバサは「くつと頷いた。

「連れて行く前に説明をする」

そう言ってタバサは俺を引っ張つて、女子寮の彼女の部屋までつれてきた。意外に力強いなタバサ…！

しかし、タバサの部屋つて殺風景だな。本棚と机とベッドしかないとは…。

同じ十五歳でもシャルロットの部屋とは大違のだ。シャルの部屋はそこそこぬいぐるみとかが置いてあつたなあ。

そんな俺の視線に気づかず、タバサは小さく呪文を唱えると周囲から音が消えた。

成る程、サイレントの魔法つて奴か。

「まず、これから話すことは他言無用。破つた場合は貴方だらうと始末する」

話さないよ。

竜帝には心を読まれるかもしれないが、それはまあ不可抗力だし許して欲しい。

そのことを口に出して伝えると、タバサはこくりと頷き、とつとつと語り始めた。

「…私の本名はシャルロット・エレーヌ・オルレアン

「…つー?」

驚いた！ タバサの本名もシャルロットなのか！

思わず口を押さえて絶叫を抑えたけど、タバサは気にせず話を続ける。

「私の父様は王弟オルレアン公で、母様はオルレアン公夫人」

「オルレアンはよく判らんが…つまるところタバサは王女様なのか！？」

「昔の話。今は王族じゃない」

そう言つて彼女は目を伏せた。

…田の奥に、憎しみの炎が見えたのはきっと僕のせいじゃないだろ
う。

それに、もう王族でないという事は…。

「肅正…されたのか？」

俺の言葉にタバサは青い瞳を鋭く尖らせ俺を睨んだ。

「さう。父様は兄王ジョゼフに暗殺され、母様は食事会の時毒を盛られた。

私自身も王族の権利を剥奪された」

そう言つとタバサはぎり、と歯を噛んだ。

いつも無表情なだけに、初めて見た憎惡の表情に気圧されて思わず息をのんでしまう。

「…事情は判つた。けど、そんな状態じゃ君のお母さんを治せない」

「どうして…？」

「タバサ。君は復讐を望んでるだろ？」

問いかけに、タバサははつきりと頷いた。
「だからなんだよ。

「お母さんという枷がなくなったら、君は絶対復讐に行くだろ」

「ジョゼフは父様の仇。復讐してどこが悪いの」

大分頭に血が上ってるな…。

まあ気持ちは判らないでもない。身内が身内を殺そうとした、という状況を味わったからだろうけど。

だけどその後は？

復讐したらどうするんだ？

「なあ、タバサ。君はジョゼフ王を殺して復讐の本懲を遂げたいの？ それともお母さんを元に戻して親子一人で穏やかに暮らせないのか？」

「！」

虚を突かれたようにタバサは固まつた。

卑怯な言い方だよな… やっぱ俺は最低な奴だ。

別に、タバサがキュルケの親友でルイズ嬢達の友人だけだからじゃ

ない。

完全な我が儘だけ……妹と同じ名をもつての子には幸せになつて貰いたいから。

「元聖職者としては修羅になんか堕ちて欲しくない。君が復讐を諦めるなり、どんな手を使つたつてお母さんを治すよ」

「……ふざけないで」

雪風のよつな、冷たい声が響いた。

「母様は確かに治つて欲しい。だけど、ジヨゼフへの憎しみは止まらない！」

次代の王に父様が指名されなかつたのは悔しかつたけど我慢できただ。けどジヨゼフはそれだけじゃ飽きたらしく父様を、母様を奪つた！！

私は、四年前のように穢やかに暮らしてこたかつた……！ すべてを奪つたジヨゼフが憎くてたまらないの――」

「……」

これが、タバサの本心だつ。なんとまあ十五の女の子には荷が重すぎた話だ。

だけど……。

「タバサの決意は判つた。条件付きでお母さんを治さへ

「条件は？」

「ジヨゼフを殺すこと」と

バツ！とタバサの身長ほどの杖が俺に向けられた。

今にも魔法が放たれそうな気配だが、あわてず騒がず叫びつ。

「別に復讐するな、とは言つてないよ。復讐の方法を変えりつて言つてるんだ」

「さつきの話を聞いていた？」

「聞いてた。要はジワジワ苦しめて復讐しなさい」と。
一息で殺したらこいつは苦しい思いして生きてるのに、あつは
一瞬の苦しみで死んじゃつだろ？ そんなのするにいつて

きょとん、と毒氣を抜かれたタバサが杖を下ろした。
…え、何その顔。

「…とても神官とは思えない発言」

「そりゃ元だし。なあ、タバサはジヨゼフに一瞬の苦しみを『えた
い？ それとも『また』にわたる苦しみを『えたい？』

そう問うてやると、タバサは顔をくしゃくしゃに歪めて震えた。
今にも泣きそうだ。

「…ある」

「泣いてもいいよ? む兄さんの胸をどーんと借りなさい。」

「本当に…あるこ、最低」

そつ音につつ俺の胸借りるのは誰でしょうか。

しつかりしがみついてきたタバサ…いや、『シャルロッテ』の頭を撫でてやる。

嗚咽なんて聞こえない振りをしておく。

この子は、涙なんて知られたくないだろうから。

貴、妹にじつじつやったことを想い出しながら、俺はずつとシャルロッテの青い頭を撫で続けた。

タバサの秘密（後書き）

イオは重度のシスコンです。

タバサもああアドバイスすればきっと大丈夫でしょう。

：個人的にはジョゼフが苦しむというのがあまり想像できないですが。

あ、珍しく竜帝の出番なしだった。

闇の裏来（前書き）

「めいせへ…めいせへ物語が動くもす。

闇の襲来

アルビオンのニューカッスル城。
そこへ唐突に訪れウェールズ皇太子とお茶を飲んでいた竜帝は、ピクリと視線を外に向けた。

「竜帝様？ どうかしましたか？」

「リュウティ殿？」

「濃厚な闇の気配だ。この感じ…以前感じた覚えがある」

それを聞いた紅蓮の魔導師は一瞬で思考を切り替え、視線を鋭くする。

「殿下、軍を召集した方がいい。竜帝様の感じたことに間違いはない」

「いや、待ってくれ。一体何が来るというのだ？ …まさかレコン・キスタの」

本の一月前の戦争を思い出し、ウェールズ皇太子は顔を青くする。だが竜帝は険しい顔のまま首を横に振った。

「あんな人間の寄せ集まりではない、もっと巨大な魔のチカラだ。恐らく魔界の眷属…」

「…」

「…判つた、非常事態宣言を出す…」

そう言つてウェールズ皇太子は近くにいた部下に声を掛けると、航空戦力に警戒を促す胸を伝え自身は父王陛下に報告するべく駆け出した。

ただ事ではない雰囲気を悟つた周囲の文官達はそれぞれのやるべきことのため一斉にテラスを去る。

紅蓮の魔導師はそれを厳しく目つきで見ていた。

僕の心情を察し、竜帝は紅蓮の魔導師に声を掛ける。

「…紅蓮の魔導師、お前はここに残れ。余計なことを考える足手纏いは要らん」

「つ 竜帝様… ありがと! やります!」

紅蓮の魔導師はそう言つと、ウェールズ皇太子の後を追つてテレポートを発動した。

テラスに一人残された竜帝は、ふつと微笑すると空の彼方へ目を向ける。

「デーモン共か… 暇つぶしなればよいがな」

黄金の双眸には、見えるはずのない黒い影 フア・ディールにおける妖魔、デーモンの姿がはっきりと捉えられていた。

*

タバサを慰め続けて何時間経つただろう。

すっかり泣き腫らした愛らしい顔は、涙でぐちゃぐちゃだった。

ハンカチで一寧に拭つてやると、タバサは恥ずかしげに顔を赤らめた。

「遠慮しない、お兄ちやんが出来たとでも思つてくれ

「…お兄ちやん？」

ちゅつと舌つ足らずな言い方でなんか可愛い…つていかんいかん！十五も年下の女の子に何ときめいてるんだ俺！？…やべ、ちゅつと暴走気味だ。びーくーる、びーくーる。冷静になれ。

よし落ち着いた。取り合えずシャルロットは可愛い。シャルもタバサも両方な！

「何してるの？」

「沸騰してた頭を冷却してた。んじゃ早速タバサのお母さん診に行くか！」

「…ありがと」

そう言ってタバサはさうじなくだが微笑んだ。

そして部屋から一歩出ると、つんざくような悲鳴が聞こえてきた。

「大変だ！ タルブの村の方に化け物が現れたらしい……！」

タルブ！？

「今までに見たこともない化け物だつて！ 赤い身体に紫の蝙蝠みたいな羽、角もあるそりや！」

「確認は取れてないけど他の国にも出現したらしい。学院も危ないかもしれない！」

次々に耳を流れる情報に、思わず目を見開いた。

噂の化け物に該当するモノの正体もさることながら、タルブの村が危ない！

「私も行く」

俺の心情を察したのか、タバサが腕にしがみついた。

「貴方に死んで貰つては困る。母様を治して、私の復讐を手伝つて貰うから」

「あれ、何時の間に手伝つこと？」

「今決めた」

無表情ながら声に悪戯っぽい調子を含ませ、タバサは言った。
この数時間でずいぶん変わったように見える。

「…判つたけど、自分の身ぐらに自分で守つてくれよー。」

そう言つてテレポートを発動するべく詠唱を始める。
外で轟音がする」とから、サイト達も出撃するみたいだ。

考える」とは同じつてか！

「テレポート…」

一瞬で景色が女子寮から草原へと移り変わる。

そこはまさに地獄だつた。

爽やかな風が流れる緑の平野は死臭が香る焼け焦げた平原へ。

所々には異形の影があり、上空で戦う騎士もいるにはいるが少なく、人々はそれから逃げ惑つている。

…許せん。

「聖なる輝きよ、今こそ魔を穿て。セイントビーム…」

威嚇がてらに広範囲バージョンのセイントビームを放つ！

降り注ぐ幾条もの光の柱が異形 デーモン共を直撃し、視線を俺に向けさせる。

…当初の予想通り、これは俺達の世界のモンスターだ。そう簡単に

は死なないらしい。

レッサー・デーモンとグレート・デーモンが交じってるな……これじゃ闇属性は使えないか！

セイントセイバーを俺とタバサの武器に掛け、ベルティナモールを油断なく構え、タバサに目配せする。

「イル・ウォータル…」

俺の意図を理解してくれたらしく、タバサの詠唱が始まる。

俺も同時に詠唱を始め、タバサより早く呪文を完成させ、解き放つ！

「汚れなき光弾よ、連なり合わさり敵を滅せよ！ ホーリーボール！」

俺達を中心に展開された数十もの白弾は、デーモンに触れると一気に膨張し爆発する。

デーモン共はそれで俺を完全な驚異と認め、村人を放つて俺の方へと一緒に飛びかかってくる。

「アイスストーム」

そこに、完成したタバサの呪文が雪嵐となつてデーモン共を翻弄する。

だが、何匹かは嵐の包囲網を抜け此方へやってくる…

そつは問屋が下ろさない一つの…

「セイントマーク！」

今度は光の柱ではなく、自分達を中心とした青白い光線を円に沿つて放つ！

何匹かはそれでチャームにでも掛かったのか、同士討ちを始めだした。

「す」「…」

「タバサ、今のうちにこれ食べて。さっきの魔法で大分精神力使つたろ」

そつと魔力のクルミを渡しておく。
タバサは半信半疑のようだったが、クルミを食べて淡い緑の光に包まれると驚いたように目を見開いた。

「精神力が回復した」

「そういう効果なんだ…っと来たぞ！」

かなり近づいてきた一体をベルティナモールで殴り倒す。

「うー、予想より数が多くさー！ 田やー田はいるんじやないか！？」

タバサも氷の槍で近づいてきた一体を確実にしとめたが、まだまだ連中は空にいる。

指定なしでエインシャント…それも魔力弾じゃなくて本物の隕石を

落とす奴をやれば一瞬で終わるが、詠唱長いし却下！
何より被害が激しい！

かといって通常のHインシャントもそれなりに長い上、魔力を大量に消費するし…。ここまで多いとボディチョンジで弱体化も難しい。

さつきからチマチマホーリーボールやってるけど…くそー、防衛戦じゃなくて殲滅戦ならエインシャントが容赦なく使えるのに！特に問題はない。

半ば恨みを込めてベルティナモールで一匹同時に頭蓋骨を碎く！幸いにしてテーモンはこっちで死んだら強制送還されるだけなので少ないので大丈夫だろ？

タバサも時々杖で応戦してるが、俺より向かつてくる量が圧倒的に少ないので大丈夫だろ？

こいつして考えてる間にもう一発ホーリーボールを発動し、三匹ぐら

い倒す。

すると、上空から凄まじい機械音が響いた！

「…遅いぞサイト！…」

サイトが乗る零戦は、轟音をたてながらも機関から発射したミサイルか何かでテーモン共を躊躇していく。

…こいつが一体倒すのに苦労してるのであつと言ひ間に十数体か！

恐ろしい威力だな！

何より、それを使いこなしてゐるサイトが恐ろしいが……これで空中から
の脅威は去つたも同然、一気に畳みかける！

「タバサ、さつきの雪嵐だ！ 今度はこれ杖を使って！」

「…」

タバサは何も言わずにこくりと頷くと、黙つて俺が渡したアイテム
サバギンのウロコを杖にこすりつけた。
サバギンのウロコは瞬く間に光の粒子に変わり、マインドアップの
効果をタバサにもたらす。

タバサは驚きに目を見張つたが、すぐに呪文を完成させた。

「アイスストーム」

先ほどと回じように雪嵐が周囲に吹き荒れる。ただし、その威力と
範囲はざつと二倍だ！

冷氣はタバサの制御によつて上空へ逃げず地に留まり、デーモン共
を氷結させていく。

「トドメツ！ ホーリーボール！…」

数十に展開された光の連弾が、デーモン共の氷像を打ち碎く！
これで地上のデーモンは片づいたなつと。

「さて上は……つてなんだあれー？」

「太陽…？」

そり、それは例えるならまさしく太陽だった。
旋回する零戦の上空に存在するもう一つの太陽は、その巨大な質量
を持つて「デーモン」を一気に全滅させてしまった。

「あれも…ひじりつきのチカラ?」

隣で呆然とタバサが呟く。

いや、彼女だつて違うと判つているはずだ。これは零戦の起こしたことじやないぐら」。

俺の知る限りこんなことができるのは竜帝と……。

「まさか、ルイズ嬢…？」

思わず漏れたつぶやきは、隣のタバサには聞こえなかつたようだつた。

闇の襲来（後書き）

もう少し戦闘シーンをつましく描写したいです……。
やっぱり描写は難しいですね。

レッサー・デーモン＆グレート・デーモン：

その名の通り悪魔。レッサーが下級でグレートが上級。
闇属性を無効化、吸収する。弱点は光。

魔法のクルミ：

MPを20回復する。聖剣3のMPの最大値は99だった気がする
ので結構な回復量を誇る。

サバギンのウロコ：

使用者にマインドマップ（精神・知性向上）の効果をもたらす。

戦いの後

デーモン達を一頻り掃討し終えると、サイトが駆る零戦が着陸姿勢に入った。

それと同時にちらほらと見物人か、竜に乗つてた騎士さんやら村人達やらが現れる。

母にほりの間治療した村長さんの姿もあつてほんとにいた。

良かつた、怪我人は少なそうだ。

けど、何でデーモンが…まさか、俺達以外にもファ・ディールから来てる奴がいるのか？

そんなことを考へてみると、くいぐい、とタバサが袖を引つ張る。

「耳」

「あ！」

忘れてた！

慌ててフードを被ると、竜騎士の一人がちょいちょいに気づいたところだった。

セーフ！

騎士さんは竜から降りると、つかつかと俺達の方へやってくる。

そして、おもむろに杖を突きつけた！

……つてこれは、もしや。

「エルフがこの地に何の用だ！！」

「　っ！」

全然セーフじゃない！

思わず出かかった悲鳴を何とか押しとどめる。

周囲からエルフ！？といつ呼び声と、時々悲鳴が聞こえる。俺は悪いことなんてしてねーぞ！」ひー。

しょりがない！

「…合図するまで振りしてて」

「一！」

タバサにだけ聞こえる声量で咳く。

タバサは一瞬驚いた顔を向けると、こくりと頷き杖を構える　ふりをした。

騎士はタバサが味方に回ったのを確認して何か言つてるけど、まあスルーだスルー。

遠くの方でサイトが何か叫んでるけど、ルイズ嬢をお姫様だっこしててこっちにこれないらしい。

何か都合が良いけど、良かつたなしつら来れなくて。

被害に遭わないぞ。

「答える砂漠の悪魔めが！　あの化け物を召喚して操つてたのは貴様だな！？」

あー煩い。

いつの間にかそこらにいた騎士全員に取り囲まれてた。

六人…ずいぶん少ないな、やつぱりつきの戦いで減ったんかね？

「無視するな！」

喚くな煩い。

騎士つてこういうもんだっけ？ やつさと口塞いじゃおう！
わざとらじく袖で口を塞ぐ動作をして、呪文を解放する。

「草花よ、眠りを誘え。スリープフラワー」

眠りの花粉が地面から舞い上がる！

咄嗟にタバサが口を押されたのが見えたが、後は間に合わなかつた
ようだな。

眠りの花粉を嗅いだ騎士達はあつと言つ間に昏倒し地に倒れる。

その際、フードも舞い上がって一際大きな悲鳴が上がる。

「ああああああ！」

「やつぱりエルフだ、化け物だあ！」

「耳長お化けえ！！」

「最後待て」

「誰がお化けじゃあ！」

思わず突っ込んだ声に反応して、悲鳴上げていた中の一人 シエスタの弟がぱちくりと目を瞬かせた。

「え…その声、イオ兄ちゃん？」

恐怖と不安がない混ざったような声だ。

「…わかつちゃいたけど凶むなー」の反応。前はあんなにじかれついてきたのに…。

はあ、とため息を一つ吐くと、タバサに配せしてサイトのところまで行く。

ルイズ嬢をお姫様だっこしていたサイトは、ぎつと俺を睨んでいた。

「…何ばれてるんだよ馬鹿やろつ」

「不可抗力！ 僕は悪くない。それよりルイズ嬢、どうしたんだ？」

「ああ、何か精神力が切れたらしくって…」

「じゃあ起きたらこのクルミ食べさせて上げな。精神力が回復するから

そう言つて魔法のクルミを袋に入れて渡す。

さも当たり前のようには話をするサイトと俺を見て、村人達の視線が
より怯えたものになつて…といつたか絶句してゐる。

うーん、俺が無害なハーフエルフですといつて信じてもう見える雰囲
気ではなさそうだ。

つか、このままだとサイトも気まずいか。

何気なくサイトの隣を確保していたシェスターに向ける。

「シェスター、怪我してる人が居たらこれを飲ませてやつてくれ

ほいつとはみつけないでリンクー、三個を渡しとく。

「！」これつてサイトさんを治した秘薬じゃないですか！

「俺のせいでも騒がせちゃったからそれぐらいはな
見たところ重傷と言える人は少ないし、大丈夫だろ。
どうやら俺達は戦闘が始まつて間もない頃にきたっぽいから死者も
いなさそうだ。

シェスターの後ろでぶるぶる震えている少年の頭を、くしゃくしゃと撫で
てやる。

「びっくりさせて悪かつたな。帰るよ、タバサ

「…」

タバサは神妙に頷いた。

そして何故か俺の頭を撫である。

思わぬ事態に呆然としてしまつ。

「…えと、これは？」

「泣きそつだから」

泣くつて…俺が？

タバサは何も言わず俺の頭を撫で続ける。小さな手が行き来する度に、自分の金髪が顔にかかつてくすぐつた。

テレポートの呪文を唱えることも忘れて撫でられるままになつてゐと、村人達の視線が俺達に向いてゐことに気づいた。

「知らなかつた…イオさんとミス・タバサはそういう関係だつたんですね」

「俺も初めて知つたぜ…つかイオつて三十路だよな。つまりロリコン

ガツゴオオオオン！－！－！

サイトの頭に全力で振るつたベルティナモールは、今まで一番良い音を響かせた。

サイトが吹つ飛んだ拍子に空へ投げられたルイズ嬢を柔らかく受け止める。

サイトの頭がトマト的になつてゐるが、死んじやあいないだろ。シエスタが必死に薬飲ませてるし。

ただし、一言おひつ。

「俺はロツコングンじゅねえ」

あえて言つならシスコンだ！

……。

……威張れる」とじやないな。

あまりの事態に呆然としているタバサと村人達に目を向ける。
……どうしようか、すこし心配する。

何もできなこまま無言でいると、村長さんが一步前に踏み出した。

そして誰かが何か言つ前に深々と頭を垂れた。俺に。

「前回の治療に続いて、今回の村の危機に尽力して下わつ、感謝します」

「……エルフが怖くないんですか？」

「ええ、恐ろしいですよ。けれどイオさん…貴方は違う。貴方は噂や伝承で伝わるエルフのように残虐ではない。

この村を癒やし、救ってくれた。

何より、そこの少女やあちらのシェスタ、それにあの少年がそれを証明してくれている

そつこつて村長さんは穏やかに微笑んだ。

「みんな、ここはエルフなんて来てないよ。ここのは前に
行らしたお医者様じや」

そつはつきり言つた村長さんの言葉に、人々は顔を見合わせ
苦笑した。

「さうですね、確かにエルフは居ませんね」

「おや、騎士様達は化け物にやられてしまったようだ、手当しなく
ては」

「…っ！ 有り難う御座います！」

やべ、涙出てきた。タバサに言われたとおりだ。
俺、泣きそうだったんだなあ…。
カッコ悪いな…けど、止まんないや。

「泣かない」

「…ちよっと前とは逆になっちゃったなあ

「お互い様」

タバサは魔法で宙に浮くと、ハンカチを取り出して涙を拭ってくれ
た。
恥ずかし、本氣で前と立場が逆転してら。

いつの間にか復活したサイトがやつてくれる、文句を言われてまたからかわれた。

ちょっと腹が立つたからルイズ嬢の面倒しつかり見ろよ、と釘刺しといった。

慌てたサイトに舌をつきだして、テレポートを発動する。

その前に村のみんなに手を振つて、な。
：またみんなで行けるといいな。

戦いの後（後書き）

ハルケギニアのエルフの問題は根強い…。

砂漠の悪魔との呼び声高きエルフですが、私は結構好きです。

しかし聖剣3のエルフは臆病で閉鎖的ですが、ハルケギニアのエルフは高慢で閉鎖的ですね。

ブリミルが原因で人間嫌いなんでしょうが、もう少し歩み寄れないものか…。

因みに今回タルブの村では受容か拒絶で2ルートあつたんですけど受容にしてみました。

基本的にハッピーエンドが好きなので…。

余談ですが本編で語られたとおりイオの髪は金髪で、襟足がちよつと長い髪型です。

…キャラ設定作ろうかなあ。

親子（前書き）

ほんとはこれが前回のタイトルだつたんですけど、長くなつたので分割しました。
相変わらずタイトル考えるのが苦手です。

親子

テレポートで学院へ戻ると、とんだ騒ぎだった。

やれ姫様が出撃したとか、太陽が魔物を焼き尽くしたとか、空から光の柱が落ちてきただとか……うん、後半一つに見に覚えがありすぎる。

ま、まあエインシャント使ってないし、被害そこまで酷くないしな！　問題ない！

といふか姫様自ら出撃とは……多分無事だと思つけど、大丈夫なんだろうか？

しかし、タルブの村の人たちには判つてもらえたけど、あの竜騎士達が追つてきたらやだなあ。 禁術だけど記憶操作でもしどければよかつた……。

……俺こんなに黒かったかな？

ま、いいや！

タバサの方に向き直る。

「今日」んな謔ぎになっちゃつたけど……お母さんのところにこくか？」

「行く」

あつぱりと頷いてから、タバサはピュイ、と口笛を吹いた。

数秒後に大きな羽音が聞こえる。シルフィードを呼んだのか。

まあ確かにタバサの家なんて知らないからテレビポートのしようがないもんな。

そう考へていると、タバサが袖を引っ張り鞄を揃した。

ん?

「小さくなつて」

「…一応聞くけど、何で?」

「監視」

…ああ、家の方は見張られてるのか。
それなら確かにボディチェンジでちびっ子になつた方が行きやすい
けど…。

「…フーッダメじゃダメ?」

「ダメ」

きつぱり言い切られて悲しくなる。

渋々と自分にボディチェンジの魔法を掛け、ちびっ子になる。

正直あまり好きじゃない。

人間の掌に乗るサイズだもんで踏まれやすいし上向けないし…色々見えるから。

幸いにもチーンジした直後、タバサが拾ってくれてその心配はなか

つたが、複雑な心境である。

「掘まつてて」

鞄に放り込まれると、口が閉じられ視界が一気に暗くなつた。…何に掘まれと、本か？

取り合えず本にしがみつき、タバサの行動を待つ。

シルフィに乗つたらしく軽い衝撃が来るが、まあどうしたことない。

「オルレアンへ」

オルレアン…タバサの家の地名だな。
確かラグドリアン湖のガリア側だつけ？

帰りにでもウンディーネに会いたいな…タバサのお母さんを診たら寄つて貰うか。

どうやらシルフィが動き出したらしく、鞄に圧力がかかる。
だけどタバサがしつかり抑えてるみたいで、大した問題じやない。

やつぱりこの子は優しい子なんだな。

「きゅいきゅい！ お姉様、今日は実家に行くのね？」

不意に、女の子の声が響いた。

「え、どちらさんー？」

珍しく、焦ったようなタバサの聲音が聞こえる。

「…忘れてた」

「きゅーい！？」お姉様、シルフィイを忘れるなんて酷いのね！」

「え、シルフィイ！？」

あ、鞄の中から叫んじました。

一度宙に投げ出される感覚が身体を襲つた。

うおつふ！ け、結構洒落にならん……つかもしかしてタバサもこれ味わつてるのか？ 動じてないから全然判らん。

「今の声はイオなのねー、どうに居るの？」

鞆の口が開かれて、外の光が差し込む。
うお、眩しい……どうじゃなく手が伸びてきてるってまさか。

予想通りひょいと掴まれてシルフィーの眼前に差し出された！

飛んでるシルフィとバツチリ目が合つてしまつたので気まずくて仕方ない。

ここは一発明るい挨拶でもするか！？

۱۹۰۱-۱۷

「……也是一個一個的？」

しまつた裏田に出た！

タバサによつて瞬時に鞆に戻されると同時に、凄まじい揺れが身体を襲うつて落下してゐるだろ絶対ーー！

「問題ない」

「問題あるやーー。」

おーひーるー！

と心の中で呟くといふと、柔らかな声が聞こえた。

「風よ。君に漂つてゐよ。柔らかに塊となりて、彼女を捕らへよ」

直後、柔らかなクッシュショーンに受け止められたかのように落下が止まつた。

：タバサ達の使つ系統魔法じやない？
先住の魔法とやらか。

「きゅこきゅー！ もひ、お姉様つたら自分で飛ぶぐりこしてほし
いのねー！」

呪文を唱えた女の子 シルフィが怒つた調子でタバサに言つ。
：顔は見えないけど、たぶん動じてないなこりや。

シルフィに拾われ、再び空へ戻るとタバサがシルフィのことを使えてくれた。

何でも伝説と呼ばれる存在で、ばれると面倒だつたから隠してたらい。

そのことを突っ込むと、シルフィはちょっと怒った調子で「いついつつた。

「伝説なんて人間が勝手に言つてるだけなのね。私からしたら、あのおじさまの方がずっといいのね！」

「おじさま？」

「ほらー イオといつも一緒にいる…」

「リュウティイ？」

「やうなのねー！」

タバサの答えに、シルフィは満足げに言つた。
…もしかして、シルフィは竜帝の正体判つてたりする？

「勿論なのね。と、いうか人間が気づかないのが不思議なのね」

「リュウティイも韻竜なの？」

「…まあ間違いじゃない」

喋れるし強いし。

けど韻竜よりずっと強大で邪悪な存在ですとは言えない…。
本来の姿なんてちつこい山ぐらいあるし。

「着いた」

…つと、やうやうしてる間に到着したらしい。

シルフィーから降りたらしく、とん、と地面を叩いた音が聞こえた。

「お帰りなさいませ、タバサお嬢様」

「ペルスラン」

声からして老年の男性がタバサを迎えたようだ。
タバサの家の執事だろう。

改めて、タバサが貴族であることを思い知る。

ペルスランさんはそれきり特に会話はなく、タバサが歩く音だけ
が反響している。

それは暫く歩いた後によつやく止まつた。
到着したらしい。

タバサに鞄から出されると、一つの扉の前にいたことが伺える。

「戻つて」

「ほいほい」

ボディチェンジを解除し、元の大きさへと戻る。

戻つたことを確認すると、タバサは扉をノックし、入室する。

「母様、お医者様を連れてきました」

「...」

入った部屋はひどい有様だつた。

元は品のいい調度品だったりつものせ、傷つき中には壊れているものさえある。

床もぼろぼろで、所々にひつかいた後や、血がこぼれたような黒いシミまでつた。

何より目に入るのは、ぼろぼろの人形を守るように立つ、やつれたドレス姿の青い髪の女性だつた。

「あなた達は誰？　また私のシャルロットを狙つてきたのー？」

「…タバサ、あの人形」

「母様は、心を病んでからずっとあれを私だと思つてゐる」

やつぱりそういうわけか。

けど、心を病んでる割には話が通じそつた。多分、人形に触らなければどうにもならないだろつ。

「奥様、私は医者です。奥様の調子が思わしくなことつこと、診察に参りました」

一応そつとつてみるが、依然として興奮状態なのでタバサに一言断つてスリープフラーを使って眠らせる。

倉庫から医療器具を引っ張り出し、お母さんの調子をはかるが…身体には問題ない。
やつぱ魔法関係か。

「毒を飲まれたって言ってたな。何の毒か判る?」

「調べた限りでは、エルフの毒薬」

「えエルフ… エルフかい!?

成る程、エルフが作ったならその落とし前は半分はエルフの俺がきつちりつけてやらねば。

例え異世界の同族だとしても、人一人の心を奪うなんて許せることじゃない。

掌にマナを集中させて体内の魔力を探る。

異世界といえども、エルフが作ったなら反応が出るはず……!

「…」

見つけた、頭の方… たぶん脳のあたりにおかしなマナの塊がある。

アンティマジック、ティンクルレインで浄化… は余計なマナの負担がかかつて悪化するかもしねないな。

ゆっくり、自然に体内の魔法効果を消した方がいい。

「…治りそう?」

「うん、この症状なら体内の魔法効果を取り除けばいい。確実に治るよ」

断言すると、タバサはその場でへたり込んでしまった。

あわてて振り返ると、小さな身体が震えて泣いているのがわかつた。

「……良かつた…かあさま…」

「よしよし、辛かつたな」

今田はお互によく泣く田だなあ…。もう田は暮れて外真つ暗だけど。タバサを慰めつつ、倉庫から星屑のハーブを煎じた薬を取り出す。

「これを少しづつ飲ませて上げれば大丈夫。このハーブには、魔法的な効果を打ち消す作用があるんだ」

「うん…ありがと」

薬をタバサに渡し、お母さんに飲ませるよう言ひ。

タバサは早速実行し、お母さんにゅっくりと飲ませた。

効果は早速出た。

副次現象としてティンクルレインとよく似た光の雨がお母さんへ降り注ぐ。

タバサには見えないだらうけど、俺の田にはお母さんを縛り付けていたマナが解けていく様子がハッキリと見えた。

ついでにスリープフラーの効果も解けたのだらう。タバサのお母さんはゆっくりと田を開いた。

ぼんやりとした眼差しでタバサを見つめている。

「シャルロット…？」

「かあさま…」

「…シャルロット… 私のシャルロット…」

「かあさま…」

わつきのように狂気に染まつた目ではなく、ハツキリと光を宿した
目をしてお母さんはタバサ…いや、シャルロットを抱きしめた。

感動の親子の再会に、何も言つまい。

ただ、月明かりが一人の髪を照らしてとても綺麗だった、とだけ言
つといつ。

親子（後書き）

星屑のハーブ：

全魔法効果を解除、初期化する。

この小説ではブイブイ草との差別化として秘薬効果だけ打ち消せます。

ただの毒ならブイブイ草の「テインクルレイン」じゃないと解毒できません。

類似魔法として最初らへんに出たアンティマジックがあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4663y/>

食われた俺のゼロ魔戦記

2011年12月17日20時47分発行